

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト  
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

# 新しい地域文化研究の 可能性を求めて

2018.3  
Vol.4

地域文化の発見、保存と活用

人間文化研究機構

日高真吾編



2018.3  
Vol.4

# 新しい地域文化研究の 可能性を求めて

人間文化研究機構  
日高真吾編

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

## 新しい地域文化研究の可能性を求めて

はじめに

挨拶

日高 真吾 7

黄 貞燕 9

セッション1 地域文化を発見する

宮城県波伝谷の地域文化を発見する——日本の民俗学からのアプローチ  
台南市「大目降」の再発見——市民活動の視点から

政岡 伸洋 10

康 文榮 26

コメント

小谷 竜介 34

謝 仕淵 42

セッション2 地域文化を保存する

宜蘭県大ニ結の文化資産の取り組み——町の記憶と保存活動  
石川県穴水町の文化遺産を保存する——保存修復の視点から

コメント

林	莫鴻	46
日高	真吾	59
許	主冠	77
末森	薫	82

セッション3——地域文化を活用する

地域資料展示と大学との共同作業の可能性

——京都市登録有形民俗文化財

「久多の山村生活用具」の展示を通じて——

博物館のあり方としての「共学」…大溪の地域参加型博物館を例として

コメント

伊達	仁美	90
陳	倩慧	103
平井京之介		114
黄	貞燕	120

セッション5 大溪における実践事例と活動の実態

パブリック・ヒストリーを主軸とした地方史

——大溪木芸生態博物館の四連棟常設展

芸術、生活と古い家の保存と活用——大溪の源古本舗の再生計画

民家と家族の記憶と技能——家からまちかど博物館へ

学習の資源としての地域文化——蘭室を例として

おわりに

温	欣琳	123
古	正君	131
劉	清剋	140
林	昕	146
日高	真吾	153

# はじめに

日高 真吾(国立民族学博物館准教授)

現在日本では、地域に着目した活動が注目されています。その背景には、情報や経済活動などが東京へと一極集中し、国全体が閉塞感に覆われてしまっているということがあります。このような閉塞感は、いろいろな地域で生活する私達にとって、精神的にも経済的にも豊かさをもたらすものでは決してありません。そこで、いま一度、それぞれの地域が活性化することにより、日本全体を覆っている閉塞感を打破する、あるいは、乗り越えようとする動きが注目されているのです。

一方、地域の現状を見つめ直すと、社会全体のグローバル化に伴う変貌は著しく、さらには、多発する災害において復興の名のもとに行われる地域再編が、これまで連綿と築かれてきた地域文化を崩壊させてしまいかねないケースが生まれています。その結果、新たな地域で生きる人びとのあいだに様々な摩擦を引き起こしています。

そこで私達は、これらの問題の解決策として、地域で育まれてきた文化を発見し、保存、活用するという実践的な研究活動を展開するために、「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」というプロジェクトを立ち上げました。

ここでは、新旧の住民を軸にしながら、大学や博物館の研究者が協力することで、新たな地域文化を創出し、豊かな地域社会を育てていくという活動の意義について、学問的にアプローチしていきます。このような実践的な活動は、日本では特に東日本大震災からの地域復興のなかで注目されており、これらの事例が豊かな地域創生に大きな広がりをもたらす可能性を有するものとして、人間文化研究においても大きな領域となっています。

そこでこのフォーラムでは、地域文化の発見、保存、活用について、台湾と日本の実践事例をおして地域学、博物館学、人類学、そして民俗学の観点から人間文化研究の果たす役割について、議論を深めてゆきたいと考えています。

## 挨拶

黄 貞燕（国立台北芸術大学准教授）

なぜ今回のフォーラムが開催されるのかというと、地域文化の活用や保存について、台湾の考え方と日本の考え方はかなり異なっている感じがするという、日高先生の意見をお聞きし、両方の異なる考え方を取り入れようと思ったからです。

日本の考え方は、「はじめに」の日高先生のお話にもあつた通りですが、では、なぜ台湾は地域文化のこと、地方文化の保存、活用などに関して考えるかということについては、ここではあえてお話ししません。ただし、台湾と日本には、違う観点があるということをあらかじめみなさんに知っていただきたいと思います。今回のフォーラムを通して、地域文化に関して面白い対話ができたらいいと思っています。

こういったフォーラムは、台中や台北、高雄といった都会で行われることが多いのですが、今回はこの大溪で開催することにいたしました。交通条件なども便利だとは言えませんが、地域文化に興味をもっているから、このような小さな町にやってきたわけです。地域文化をどのように発見し、保存し、活用していくのか、この大溪の何年間の努力に注目します。

それをふまえ、今回のフォーラムで意見交換をしていただきたいと思います。

セッション1 地域文化を発見する

## 宮城県波伝谷の地域文化を発見する

### ——日本の民俗学からのアプローチ

政岡 伸洋（東北学院大学教授）

#### ◎東日本大震災と民俗学

東日本大震災に対して、私が専門としている民俗学では次の四つの研究が行われてきました。一つは被害の状況を語り継いでいくという作業、記録（記憶）に残していくということですね。そして二つ目は、震災後の動きを記録するものです。三つ目が近代文明の限界を論じようとするものです。そして四つ目が文化財レスキューなど被災地への支援で、なかでもこの文化財レスキューは特に注目を集めてきました。

文化財レスキューは、あくまでも文化財行政の枠組みのなかで、被災地側のニーズというより、文化財の保護というものを軸にシステムとして行なわれてきた活動です。

それに対して、私が専門としている民俗学では地域に起こる様々な現象に対して暮らしというものを軸に考えていこうとする点に大きな特徴があります。

つまり、この二つのあいだには、厳密に言えば距離があるのではないかと思います。そこで震災から五年が経った現在、被災地への支援活動の成果をどう学問的につなげていくか、そこから何を考えていくかということが、大きな課題になっているかと思っています。本報告がその試みの一つになるかと思っています。

このような状況に対して、報告者が行った宮城県本吉郡南三陸町戸倉波伝谷での、オネンブツと呼ばれる民俗行事への支援活動は、単に被災地支援という枠組みを超えて、地域の民俗の意味を考える点でも非常に重要な機会となりました。そこで、震災後の波伝谷での動きをふまえつつ、報告者が体験した支援活動とそのプロセスのなかでの地域文化の再発見の事例を紹介するとともに、そこから見えてきた学問的課題についても考えてみたいと思います。

まず「波伝谷にとつての東日本大震災」。ここでは、震災前の暮らしの特徴をふまえつつ、オネンブツへの支援依頼にいたる動きを、春祈禱の復活を軸に紹介していきたいと思っています。二番目は「支援の方法を考える」。波伝谷への支援については、震災前からの関係性もあり、地域性を反映させた方法を模索し続けていったわけですが、そのプロセスを紹介していきます。

そして3番目に「なぜオネンブツの支援だったのか」。今回の支援活動は現地からの要望により行ったものでしたが、なぜオネンブツの道具類だったのかを分析することで見えてきた、地域文化の特徴について明らかにしたいと考えます。

そして、これらを通して、被災地の支援活動を学問そのものの議論につなげる方法の可能性について考えていければと思っています。



### ◎震災前の波伝谷

最初に震災前の波伝谷の暮らしに対する理解について報告したいと思います。

今回とりあげる南三陸町戸倉波伝谷地区は、リアス海岸で知られる三陸沿岸の南部、志津川湾南岸の戸倉半島に位置しています。震災前の戸数は八二世帯、人口は二八四名というふうになっていました（二〇〇〇年現在）。

ここで、私と波伝谷との関わりについて少し述べておきたいと思います。私は二〇〇四年四月に東北学院大に民俗学の担当教員として赴任しました。そして、翌年の三月より、東北学院大学民俗学研究室と、今回コメントしていただく東北歴史博物館の小谷竜介先生、そして波伝谷高屋敷民俗資料館の鈴木卓也先生との共同で総合民俗調査を始めました。そして、二〇〇八年三月にその成果を『波伝谷の民俗―宮城県南三陸沿岸の村落における暮らしの諸相―』としてまとめ、東北歴史博物館から刊行しました。

その結果についてポイントをまとめてみると、生業は、ホヤ・カキを中心とした養殖業と農業が中心になっていて、各家の自立性が非常に顕著であるということです。歴史的展開を見ると、農業を軸としつつ、製塩業、養蚕、養殖というかたちで、各時代のニーズにあわせ、自然環境を最大限に活用した暮らしが営まれてきたということです。

社会組織で注目されるのは契約講です。春と秋の年二回、総会があり集まっていたのですが、コミュニティというより、むしろ各家の利害調整の場として機能してきたといえるかと思いますが、

震災前の波伝谷の暮らし 一生業―



農業



養蚕



養殖

す。そして、とくに行政との折衝は必ずこの契約講を通して行われていました。契約講の構成員は、跡取りが結婚すると、脱退し六親講に加入します。さらに今日の報告に関わるところでは、夫が契約講に加入すると、妻は観音講にはいる、そして、夫が六親講員になると、妻は念仏講に加入するということがあげられます。

そして、春祈祷と呼ばれる行事があります。若者達による獅子舞が各家を一軒ずつ回り、集落内の厄災を払うというものですが、暮らしのなかでのポイントとしては、波伝谷の様々な人びとが関与し、世代間交流の場ともなっています。つまり、波伝谷の人びとをつなぐ重要な行事として位置づけられてきました。



震災による被害状況



波伝谷の被害状況



養殖関係の被害状況（戸倉全体）

移動します。避難所で暮らして一週間くらいした頃に、役割分担を明確化し、共同避難生活が始まります。そして四月四日に内陸部へ遠隔地避難が開始されます。

ここでおさえておくべきは、津波により暮らしが完全に消滅してしまい、人びともばらばらになっていったという点です。

その後八月になると、復興にむけての歩みが進み始め、仮設住宅が完成します。特にポイントは、ここでつくられた集会場が、波伝谷の人びとが集まる重要な場所になっていくということです。

このようななか、契約講が再開されるのですが、その歩みを少し振り返りたいと思います。

遠隔地避難が開始される前の四月一日に貯金を分配し、一度は休講になります。しかし、一〇月頃に高台移転の話が出てくると、やはり行政との折衝がありますので契約講が必要との話になります。

そして二〇一二年三月四日に海洋青年の家にて総会が開かれ、新役員も承認され再出発することになります。これ

震災前の波伝谷の暮らし —社会組織—



契約講

震災前の波伝谷の暮らし —春祈禱—



以上をまとめると、波伝谷の暮らしは、時代のニーズにあわせ、自然環境を最大限に活用しつつ、各家の独自性が非常に顕著な生業があるということ。そして、独自性が顕著であるがゆえに、家々の利害調整の場としての契約講がある、さらに、そのなかで人びとをつなげる春祈禱があるということになります。これが、震災前に調査した私達の波伝谷に対する理解であつたわけです。

#### ◎波伝谷にとつての東日本大震災

このような波伝谷も、東日本大震災で大きな被害を受けます。その状況をお話していきたいと思います。

津波に襲われた波伝谷では、高台にあった一戸を残し全戸流出、十六名が犠牲になりました。養殖関係では、戸倉地区全体あわせてですが、一一億四八〇〇万円ほどの被害がでました。

三月一日の地震直後は、近くの高台へ避難します。その後津波が襲うわけですが、一晩中津波がきていたということで、ようやく落ち着いた翌一二日の午前中に避難所へ



養殖業における復興支援事業の特徴  
養殖業の復興支援事業「がんばる養殖」



仮設住宅をまわる春祈祷

各家のそれぞれの方法、技術がぶつかり合う状況になっていました。互いの経験や知識を共有できる反面、技術や効率性の差が露骨にあらわれ、これを原因とするトラブルも発生しました。

震災前の暮らしをモデルに生活再建を模索していくなか、転換の必要性はなかったのに、協業化することにより、かえって地域をバラバラにしてしまうような状況が生まれてしまったのです。

このような混乱のなか、春祈祷が復活することになります。「春祈祷を思いだして涙を流した人がある」という話が若い人のあいだに伝わったことがきっかけなのですが、そういうなかで地域の団結をはかろう、春祈祷を復活させようという動きがでてきます。そして、二〇一二年の四月一日に仮設住宅をまわっていくかたちで春祈祷が行われます。

仮設住宅を単位にまわっていくかたちは、各家をまわっていく本来のかたちとは微妙に違うのですが、それでも、参加した人、出迎えた人、食事の準備をする女性達、すべての人達がこれまでの混乱のなかで強いられてきた日頃の苦労を忘

契約講の「復活」



波伝谷仮設住宅の完成



は各家の利害調整、行政との折衝という震災前の契約講の役割を活用し、またそれに期待するような動きであると理解されます。

そういうなかで、仕事も再開されていきます。五、六月に瓦礫の撤去が行われ、並行して流れ着いたメカブを利用してワカメの種をつくったり、カキ養殖再開の準備を始めていたりしていきます。ここでおさえておいていただきたいのが、震災前の暮らしをモデルに生活再建へ進もうとしている点です。

しかしこのような状況のなか政府による復興支援事業が開始されます。これが、「がんばる養殖」というものですが、波伝谷の従来の方式とは大きく異なります。従来個人経営であったものが、共同作業をし、給料をもらうようになかたちになりました。つまり、企業で働く従業員のようになかたちに変えられてしまったということです。

具体的にどういうところで混乱が起こっていくかというところ、やればやるほど収入があがる従来の方式から給料制に移っていくということ。個人経営からサラリーマンになるということ。ここで、転職と同じ感覚であったかと思われれます。ここでは、

れ、震災前に戻ったかのような明るい笑顔をしていたのが印象的でした。こういう民俗行事が復活することによって、困難を忘れるような状況が生まれたということになります。

この春祈祷の復活をどういうところに位置づけるか、まずは、震災前の暮らしが戻ったかのような印象を受けます。マスコミでもそういうふうにとりあげられました。しかし実際は、「復活」ではなく、混乱のなか、震災前の暮らしを活用し「創出」したものといえるかと思います。地域がバラバラになってゆくなかで、つなぎとめるものを、震災前の暮らしのなかから探したときに、春祈祷が一番ふさわしいのではないかということになって、この春祈祷を活用して、バラバラになった状況に対応したということが言えるのではないのでしょうか。

以上が震災後の波伝谷の動きになるのですが、このようななか、今回とりあげる、オネンブツの支援が行われました。

### ◎「支援の方法を考える」

それまで私自身もいろいろと波伝谷のみなさんにお世話になっていましたので、混乱していくなか、何かできないか模索していました。そのなかで、震災後最初に波伝谷にうかがったのが二〇一三年の五月二八日で、その後一月二六日、一月四日と訪問したわけですが、この頃はまだ、何をどのように支援したらよいのか具体的な案は思い浮かばない状況でした。

それが具体化してくるのが、二〇一三年の年末から年明けにかけてです。ちょうどこの頃、「春祈祷を復活させたいんだけど、道具などを流されて困っている」というお話をお聞きして、この

春祈祷を支える契約講や戸倉神社への支援ができないかと模索するようになりました。そんななか、二月二七日から二九日に民俗調査で訪問した際、契約講長に支援の申し出をしました。具体的にはあとで紹介しますが、震災前の調査で、契約講および春祈祷が、波伝谷の暮らしにとってきわめて重要であると位置付けていましたので、これからの波伝谷の暮らしにとっても大きな意味がある協力となるのではないかと思い、そこに支援をしようという動きになっていきます。

一方、こちらからそういうアプローチをしようとしていたなかで、波伝谷仮設住宅の自治会長から、オネンブツで使用する大きな数珠などの道具類を何とかできないかという依頼がありました。波伝谷からの支援依頼は初めてで、非常に驚いたのですが、そこで、波伝谷の暮らしにとって、オネンブツというものが重要であったことを気付かされるわけです。しかし、この段階では、なぜオネンブツの道具類なのか、私自身はまったく理解できていませんでした。

ただそのなかでもオネンブツの道具類をどう支援するかが大きな課題となりました。そして支援をする際、単純にこちらの発想だけではなく、地域性を考慮した方法を模索しようと動いたわけです。どのように道具類を揃えたいかということ、まず考えたのが仏教関係の組織からの寄贈でした。日本仏教会や報告者の母校である佛教大学など、いろいろと相談してみたのですが、支援してくれるところがなかったというのが結論でした。

なぜ、オネンブツの道具類への支援が難しいのかという点については、オネンブツのような数珠練りというのは、仏教行事とはいえ、あくまで住民主体の行事であって、寺院側主体の行事ではないということが一つあります。それから、祭りや民俗行事とは違い、ひじょうに地味でマス





震災前のオネンブツ

それらオネンブツの道具類に関しては同年八月一六日にお披露目会がひらかれ、多くの女性のみなさんが集まりました。震災後これだけ多くの人が集まったのははじめて、というような語りもきかれました。その後、この道具類をつかって旧暦の二月一五日と春秋の彼岸の日に波伝谷仮説住宅の集会所で念仏講が行われました。

というような流れであったのですが、なぜこのオネンブツの支援が波伝谷の女性達にとって、大きな意味をもっていたか、ということになります。

のなかで、卒業生からの恩返しというのは、互酬制の文脈とも整合性をもち、一番良い方法ではないかと考えたわけです。

そして、支援金が集まるわけですが、それをどう使うかというところで、まずやったのは春祈禱への支援で、参加者の飲食代として寄付をしました。なぜかというと、震災前は「休み場」での食事が参加者の楽しみであったことと、飲食代というのは公的な支援の対象になりにくいという二点があったからです。そして、オネンブツの道具への支援に関しては、数珠や太鼓、鉦を購入し、二〇一四年七月二日に東北学院大学民俗学ゼミ卒業生有志一同から恩返しというかたちで道具類をお渡ししました。その際には涙を流す人もおられて、その意味の大きさにあらためて気付かされました。



オネンブツの道具類のお披露目

コミなどにとりあげられにくいということもあったと思います。いずれにしても別の方法を考えないといけないということで、次に思いついたのは、「恩返し」という方法での支援でした。

東北地方というのは互酬制が顕著で、返せない場合は支援も断るような極端なケースもあります。

そこで思ったのは、調査の際に協力していただいたことに対する卒業生からの恩返しという意味で支援することです。一方的な支援は逆に被災地に精神的な負担をかけてしまう危険性もあります。その頃、実際に卒業生からも、何か支援したいという声が届けられていました。そ

そこで震災前のオネンブツについて少し紹介しておきたいと思います。

#### ◎なぜオネンブツの支援だったのか

オネンブツは念仏講とも称され、六親講員の妻によって構成されています。三軒一組でテエマエをつとめ、その際に出される食事の準備等をするのですが、この行事での一番ポイントは、「オネンブツだけは、ほかを嫌わない」という説明がなされる点です。実際には念仏講員が中心になるのですが、行事に関しては、構成員でなくてもホトケの出た家は、みんな数珠繰りに参加してよいということになっています。つまり、波伝谷の女性全てが関わることのできる唯一の行事であったということになります。

行事の具体的な内容は、旧暦二月一五日の行事をシャカネンブツ、春秋の彼岸の中日に行われるものをヒガンネンブツといいます。とくにヒガンネンブツのほうは、直近に亡くなった人の供養で、各家の墓参りが終わると集まり、テエマエと新たにホトケが出た家は、その位牌を持参し祭壇に置き、数珠繰りと念仏唱和を行い、精進料理をいただくということになっていました。

そしてなぜ、このオネンブツの道具類だったのかというところですが、一番大きな点として、「震災による社会的任務の喪失」があげられます。姑世代が中心となって担ってきた、亡くなった方への供養の場が震災によって失われてしまったということが、いちばん大きかったのではないかと思います。多くの人が津波やその後の混乱のなかで亡くなったにも関わらず、姑世代の重要な任務である死者達の供養ができないという状況になっていったということです。と同時に、

復興支援事業の対象は、養殖業に関するものが中心であって、支援の話も春祈禱が中心でした。姑世代が中心に担ってきた畑仕事や死者供養は、ほとんど準備されない状況でありまして、一般的な社会弱者として、手助けの対象のように扱われてきたという点があります。

これらをふまえていうと、東北地方は互酬制が顕著な地域であって、この点からすれば、少しでも早く、自らが担うべき社会的役割を果たしたいと思うのは当然のことだったように思います。そして、もう一つは、オネンブツという行事がなぜクローズアップされたのかという点ですが、それは、全ての女性が関与できる唯一の行事であったということになります。今回の震災で注目を集めた春祈禱は、女性が担う仕事もあるにはあるけれど、前面に出るのは男性です。地域の結びつきを再確認しようと、男性中心の春祈禱が復活の動きをみせはじめたとき、女性が前面に出たオネンブツの重要性も再認識されたのではないかと思います。

二点目も重要だと思います。このオネンブツが死者供養という点を担ってきたわけですが、この死者供養という点でも、震災後最初に行うのに相応しい行事としてその必要性が強調された可能性もあります。そして、これら機能的な側面でも重要視されたと同時に、仮設住宅に入居していくなかで、女性、特に姑世代がバラバラになっていった状況も影響し、早く復活したいというような思いが募ったことは想像に難くないと思います。

三つ目として、「支援依頼の背景に何があったのか」ということですが、このようにオネンブツの「復活」は、震災後の混乱のなか、その矛盾や葛藤の解消のために必要であったということです。この点からすれば、春祈禱と同様の背景があったのではないかと思います。

この時期、被災地では次々と民俗行事や民俗芸能が「復活」し注目を集めたわけですが、単純に、そのまま復活したのではなく、その背景には被災地の矛盾や葛藤があり、それに対応すべく、震災前の民俗を活用したものとして理解するべきということです。そして、その際に、地域の人達がやはりこれは復活させるに足る、または復活させたい、と思わせるような震災前の文化を活用する、そこに地域の暮らしの大きな特徴がでていたのではないかとことになります。

最後に、文化財レスキューを含めた被災地支援の実践例の研究ということですが、ともすれば「これだけ貢献しました」という自慢話になりがちです。文化財レスキューだけではなく、被災地をこんなかたちで支援しました、こういうことをやってみましたという研究が非常に多い。それ自体は悪いことではないのですが、これをいかに研究の俎上にのせていくかが、重要な課題になってくるのではないかと思います。そういう点を含めて、支援を巡るプロセスを地域の文脈との対比で検証していく必要があるのではないかと思います。

本報告は、そのあり方の一例をしめすものなのですが、この結果、これまであまり注目されてこなかったオネンブツの重要性が、支援の活動のなかで再確認されたということになります。という点からすると、支援活動そのものが地域の文化をもう一度考え直す実証実践の場であったということが言えるのではないかと思います。

被災地というのは、もちろん支援をする必要があるのですが、と同時に地域文化を考えるための、もしくは地域文化を発見するための、重要な場所にもなっているのではないかと、学問的にもそう考えると、どんどん活用していいのではないかと思います。

被災地の学問的支援そのものも重要なだけけれど、助けて終わりではなく、その後の分析を通して、地域文化を再発見していくことこそ、震災から五年を経た現在、私達研究者に求められている大きな課題なのではないかというふうに考えています。

これによって被災地支援の学問的重要性がさらに主張できるのではないかと考えています。



写真① 日本時代の総督府中央研究所農業部糖業科は新化で設立

オリランダ統治時代には、新化でオリランダの言語やオリランダに関する教育が行われました。オリランダ人が教会の学校をつくり、聖書に関する教育も行われました。宣教師も駐在していたわけです。その後、「感化里」と呼ばれる時期を経て、清の時代になると、「大目降庄」と称されるようになります。この頃には、シラヤ原住民族だけでなく、漢民族も住むようになってきました。

一九世紀末に日本による統治が始まります。二十世紀初頭、台湾総督府直轄の糖業試験場が設立され、その後、一九二〇年の行政区分変更により「大目降」は台南州新化郡「新化街」となり、新化郡役所が置かれました。九つの街庄を管轄する「新化街」は、学校教育や、

セッションー 地域文化を発見する

## 台南市「大目降」の再発見

### ——市民活動の視点から

康 文榮（台南市新化楊達記念館の設立の提案者）

私は新化で心身障害を持つ子どもへの支援活動を中心に社会福祉活動をはじめてちょうど二〇年になりました。我々は「潰れたヨシが折れない」という信念をもっています。これは、聖書からとった話です。私は徐々に文化活動に転向してきたのは、やはり主な考え方は、「愛と尊重のある環境で人びとを育てるべきだ」と、そして、「みなさんが共有の生命の目的を実現するべきだ」ということです。各コミュニティの要望、そしていかに平等に発展していくかが重要です。今日の話は、いくつかの数字から始めたいと思います。

現在の新化でシラヤの教会の学校が設立されてから三八〇年になりました。また、台湾文学者の楊達の生誕一一〇年の年でもあります。そして、新化大地震があつてから七〇年になります。この大地震では大きな被害が出ました。

それでは、「新化」というところの地名の沿革についてお話していきたいと思います。「新化」は最初「大目降（タヴォカン）」と呼ばれていました。タヴォカンは、シラヤ族の言葉で、山の

土地、あるいは神という意味もあります。シラヤ族には、新港社、蕭壠社、麻豆社、目加溜灣社、大目降社といった五つのグループがありました。大目降社は、いつからあったかわからないですが、オリランダ統治の最後の一六六二年前に、すでになくなったことがわかりました。台湾文学館の館長がお話くださったのですが、「新化」がもともと「大目降」であつたことを記す本、また「大目降」がシラヤのふるさとであると記された本もあります。



インフラ設備の中心としてその推進に力を入れていきます。

第二次世界大戦が終結し日本による統治も終わると、「新化街」は台南県新化区「新化鎮」となりました。この「新化鎮」は、台南県と台南市の境目になっているのですが、二〇一〇年の行政的な変更によって、台南市「新化区」になったわけです。そして、この周辺で南部科学工業園区を建設しようという計画があるので、二〇一三年にこの工業園区の所在地を含め、新化区などの七つの区を「南科区」として合併しようといった計画がありました。それに対して、地元の七十パーセントの人達が賛成しています。しかし、歴史を関心する私達は、そうになると、「新化」がなくなり、忘れてしまったと思います。やはり地元の歴史を守らないといけないと思います。そのため、「大目降」から「新化」にいたる経緯について、『大目降新化 in g 社区報』という地元誌を発行したり、「文化が失われていきますよ」というようなテーマで演劇を演じたりしてきました。

「新化区」は、南部にあつて海にも近いところです。そのため、新しい都市の中心地として建設する話もでてきています。「大目降」はシラヤ族の居住地「社」でした、その後、シラヤ族が漢民族化して、社から「庄」「街」になって、いまは「区」になって、という行政的な変化があります。

新化の歴史と文化は、台湾の文化多様性を反映する好例です。地元の宗教を例にすれば、関羽のお寺があつたところの写真もあります。海の神様媽祖のお祭りの写真もあります。医療の神様である保生大帝も、新化で最初に廟が建てられました。一八六五年に、スコットランド出身の宣

教師ジェームス・マクスウィルがやってきて、教会をつくつたという歴史もあります。最初の宣教師は全部西洋人でしたが、台湾籍の牧師第一号である劉俊臣が、カゴに乗って「新化」にはいつてきたといった記録がありました。

地理的な環境から考えますと、新化は交通の要所に位置しています。それから、一九一五年に日本政府に反抗した噍咻事件がありました。その事件をきっかけに、日本政府がこの地域に注目し、鉄道会社を開発し、運営をはじめました。「新化」は先ほどお話した通り、いろんな教育の始まりの地域であるだけでなく、鉄道会社の運営もここから始まったのです。

我々の調査により、一九二〇年代の「新化」は非常に栄えていた時期でした。そのなかには重要な日本人が四人いました。

まずは、大目降弁務官を務めた石川弋足氏です。画家である彼は、教育の場をつくりました。開幕式のときには詩人の友人に詩を書くように依頼しました。「新化」における現代教育の創設者といえます。絵画展を開催したり、詩集を出版したりもしました。

次は、新化郡第二代郡主の杉山靖憲氏です。赴任した伊一九一六年には『台湾名勝旧蹟誌』を編纂、三三一件の名勝・旧蹟を紹介し台湾文化の評価に貢献しました。一九二四年にはたくさんのことがありました。鉄道会社、糖業試験場を運営し、畜産品の品評会も開催しました。また町の改良計画も立てていきました。

そして「新化」では糖業試験場が非常に注目を集めました。製糖業に関する研究は一九三〇年代に一番盛んになりますが、そのキーパーソンが、金子昌太郎科長です。彼は『甘蔗農学』



写真③ 新化公学校学長の中村亀吉さんの退官前。学校の先生と学生たち

糖業試験場などの写真もあります。

現在の話に戻ります。我々は新化の歴史や「大目降」を再発見しようとした活動は、台湾の文学を代表する一人の楊逵に注目して様々な関連するイベントをはじめました。それは、新化出身の楊逵の生涯は、その時代と歴史を反映するものであったからです。楊逵は、一九〇五年に大目降で生まれ、一九一五年に一一歳になった少年は、噍吧哖事件を目撃し、衝撃を大きく受けました。それから彼は、一九二四年に台湾を離れ日本に渡り、日本大学芸術学部文学芸術家の夜間部に進学しました。当時日本では労働運動と学生運動の萌芽期であり、楊逵も反田中義一内閣のデモに参加し、また在日朝鮮人の活動を支援し逮捕された履歴もありました。一九二七年に台湾に戻り、台湾での社会運動への参与及び自分の文学創作をスタートしました。

楊逵の作品である『新聞配達員』では、主人



写真② 糖業科の科長である金子昌太郎とその著書『甘蔗農學』

です。例えば、中村校長が農業学校の二年生の学生さんと一緒にうつつている写真があります。

そして日本時代の重要なイベントの「新化郡畜産物産品評会」を紹介したいと思います。これは二〇年代のマーケティングの非常にいい例ではないかと思えます。「地元の畜産品などの産品」「教育の成果」「お祭り」を全部集めて紹介するものですが、初日の参加者は一万四千人にのぼりました。新聞の報道もありました。つまりここは、経済的な成果、教育的な成果を展示する場所となっています。一つのコミュニティへの支援を全体的にまとめると、このくらいいい成果が出せるという証拠です。その品評会の様子が残されている絵はがきがあります、地元の役所、

(一九一三年)という本を著しましたが、これはおそらく、当時最新の農業教材であったと思われます。そして西来庵事件では、地元の人を守る役割も果たしたので、彼は、地元の人達から命の恩人として尊敬されています。もちろん、台湾糖業に関して、多大な貢献をしてくれました。

最後に紹介したいのは、新化公学校の中村亀吉校長です。現在、約十冊の彼に関する著作があります。彼は、校長を九年間つとめ、いくつかの分校もつくりました。農業専門学校なども彼がつくりました。それだけでなく、地元のコミュニティづくりにも尽力されます。「新化青年団」という組織をつくりました。残されていた写真の多くは、この「新化青年団」のイベントのもの



写真⑥ 新化中学校にある「みんなと一緒ににはしろう」といったテーマのアーツ・プロジェクト



写真⑤ 2005年に開館した楊逵文学記念館

年地政事務所の建物を再利用して開館しました。記念館のなかでは、楊逵の生涯と文学とその時代が紹介されています。二〇一五年に、日本時代に作った武徳殿を再利用して大目降文化園区のコア館として使い始めました。そして噍吧哖事件の百年記念で我々は「少年時代の楊逵に会いましょう」といったイベントを行いました。そして、毎年楊逵の誕生日の一〇月に「音楽会」を、亡くなった日の三月に楊逵の作品に因んで「大家來賽跑」(みんなと一緒ににはしりましょう)というイベントを開催するようになりました。毎年三月の楊逵の誕生日にコンサートを開催することになっています。これらの活動を通して台湾を代表する文学家と新化の歴史を忘れないように頑張っています。



写真④ 日本時代の武徳殿は、2015年に大目降文化園区のコア館になった

公は日本から帰ってくる船に乗っているとき、台湾は確かに豊かな土地だと見えたが、じつは、様々な課題を抱えていると思っていた描写があります。楊逵の小説は、個人的な生活や思いと関わっている伝記型のものが多いですが、下級階層や労働者の意識、あるいは生存権などを描いた作品も多いです。楊逵は、政治的な事件で投獄されますが、『つぶされないバラの花』という作品を書いています。そのあとに七〇年代になって、台中の方に移り住みます。台中は、経済がよくなってきたのですが、文化がどんどんと衰退している、そこで、自分のもっている土地を寄付して、自分の理想的な文化村をつくろうとしました。

二〇〇〇年に、我々は新化で楊逵文学記念館を作ろうと提案して、二〇〇五





写真② 山元町 2011 年 12 月  
神社を再建する  
周囲には 500 軒ほどの家があった



写真① 石巻市雄勝町 2011 年 6 月  
まだ多数の瓦礫がある

こちらの写真②は、宮城県の一歩南、山元町の神社の跡地に建てられた社です。もともとの建物は津波で流されて、跡地にこのかわいらしい社をプレゼントしてもらいました。ここは、すぐ風が強いところで、震災前は防風林としてマツが植えられていたのですが、それも津波で全部流されてしまいました。このお社は、撮影をした数日後には風で飛ばされてなくなってしまうそうです。やはりこれも、五〇〇軒くらいの家がある場所だったのですが、人が住むことができなくなって、住民は、もっと内陸の方に移っていきました。ただ、神社は動くことができますないので、この場所で、ぼつんと再建する予定です。お祭りはやっていて、その際は、内陸から人が集まってきます。

写真③は南三陸町の、再開したお祭りの様子です。ここには五十軒くらいの家がありましたが、もう人が住むことはできません。家が建ち並んでいた集落の跡地を御神輿がまわっていきます。

こういうなかで、私がこれまで見てきたフィールドを考えていかなければいけないわけですが、その一つとして、芸能というものをもっと考えています。

## コメント

### 小谷 竜介（東北歴史博物館）

私自身、いまは博物館の学芸員をやっておりますが、震災がおきたときは県の教育庁という、文化財の保護を行う役所の職員を務めていました。役所の人間であり、博物館の人間という立場、それ以上に大きいのは、私は宮城県の沿岸部、海の方をずっとフィールドにして様々な研究を行ってききました。今日はそうした立場からコメントをさせていただきます。

東日本大震災の津波は、私のフィールドを全部なくしてしまったということになります。なので震災後は、自分のフィールドだったところとどういうふうに向き合っていくのかというのが、私にとって大きな課題になっていったわけです。

写真①は、石巻市の雄勝という非常に被害の大きかった地域の一角で、まだ瓦礫が結構並んでいる状況です。ここだけで二〇〇〇人くらいが住んでいたところなので、家が立ち並び、見通しの悪いような場所だったのですが、震災後はこのようにがらんとなくなりました。ここは危険地域だということで、人が住むことができなくなった場所です。震災前、雄勝全体では、八〇〇〇人の人口があったんですが、今後は以前の約二割、一五〇〇人ほどに減ってしまうことがわかっていきます。



写真⑥ 気仙沼市浪板  
虎舞の再開



写真④ 女川町 2013 年 9 月  
避難所で作った座布団製獅子頭

かと思えました。

写真④は、獅子舞の獅子頭です。台湾の方も獅子舞はご存じかと思いますが。ぱっと見るだけだとよくわからないかもしれませんが、この獅子頭は、座布団とスリッパ、それにビール缶でできています。すべて避難所にあったものです。避難所にあつたもので獅子頭をつくって、避難所のなかで獅子舞をやっていたんです。本来の獅子頭は津波で流されてしまったのですが、こういうことをすでに四月の段階でつくっていたという話です。

写真⑤も、多くの人が被災し亡くなった浪板という地区で、何も無くなってしまうたなか虎舞をやっている様子です。支援にきてくれた米軍が撤収するとき、お礼で虎舞をやるうという話になったそうです。五月のことです。「そんなことをやっていいのか」という意見もあったそうなんです。子どもを亡くしたお母さんが、「ぜひやってくれ」と後押しをしてくれたという事です。

ここでもう一つおもしろいことがあります。浪板の虎舞というのは、そこに住んでいる人しかやってはならないというふうに言われていたんですけれど、その浪板の半分以上は人が住め



写真③ 南三陸町 2016 年 4 月  
神社の祭りの再開 50 軒程の家が建っていた集落の跡地

芸能に関して一番重要なことは、震災から二カ月しかたっていない二〇一一年五月の段階で、すでに「芸能をやるう」と笛と太鼓を鳴らして、ダンスをするという話が出ていたということです。

多くの人達が家を無くして、とりあえず避難所で寝起きをしている状況のなかで芸能をやる、それは、地域社会にとって芸能というものが、たんなる楽しみではなく、もっと重いものだからではないかということをおもったわけです。

一つは、芸能には人びとを寄せ集める力があるということであり、もう一つは、日常をとりもどす第一歩が民俗芸能ではないかということです。家も仕事も全部無くなったなか、芸能をやることで、震災前の日常の暮らしを、まず簡単にとりもどすことができる、そういう力があるのではない



写真⑦ 南三陸町波伝谷 2016年3月  
高台移転地と嵩上げ道



写真⑧ 南三陸町波伝谷 2008年2月  
ここが全て流された

波伝谷というのは、震災前はこんな感じのところでした(写真⑥)。それが、いまではこんなふうになっています(写真⑦)。この辺りの家が、全部流れてしまいました。もとは林だった山の上に、いまは家が並んでいます(写真⑧)。これは震災後に土をもつて、防波堤を兼ねるような道路をつくっているところです。

ここも家や田圃があったところでした。こういうなかで、新しいニュータウンのような家が並ぶ、そして、ここで行事をやるということをしています。家の並び順が変わったりして、どうしようと悩んだりもしています。

芸能の発見、文化の発見と書きましたが、芸能というのは文化財としても見るができる、と同時にやはり地域社会とくっついていてから行われているともいえます。

そもそも、地域の人びとは、芸能がなぜ行われているかということとは全然考えていない。日常のなかではふつうのものであって、何月何日になったら獅子舞をやるものだとは思っていないわけですね。しかし、いざやれなくなったときに、やらなければいけないということをすごく思ったりする、そういう意味では、芸能の力が非常にはつきり見えてきたのが、東日本大震災という災害の

なくなってしまうって、住民達は、各所に散り散りバラバラになってしまいました。そうすると、浪板虎舞ができる人間が浪板の人であるという論理に変化したのです。

震災の後、県庁にいたときに、副知事がメキシコを訪問するので、そのお土産に、虎舞の音源をもっていきたいと電話がかかってきました。浪板からメキシコに移民した人が、現地で虎舞をやっている、もう百年以上前の話なので、本場のちゃんとした虎舞をみたいという話があって、お土産にもっていくとなったようです。先ほどの論理からすると、今後はメキシコにも浪板の人がいるということになるのかなと思っています。

そういうかたちで、地域のものや文化を通して、地域が変わってくるというのが、この震災の後に起こったことの一つだと思っています。

震災から五年を経た民俗芸能ということですが、芸能というのは、もちろん娯楽でもあり信仰の表象でもあります。東日本大震災で津波の被害を受けた場所にいくと、地域社会全体を象るものとして、芸能というものが行われているということが徐々にわかってきました。

であるがゆえに、高台移転などにより、新しい集落が形成されると、そこでは新たな戸惑いも生まれています。一方、浪板のように芸能を続けることによって、地域社会の人びとをつなぎとめるという例も見えてきました。

政岡先生と私は、大学と博物館とで共同調査をしていくということですが、まさに、地域文化を発見するという行為をやりつつ、地域文化自体がなくなってしまうというなかで、もう一度いろんなことをやっていこうという活動を試んでいます。



付いたというところもあるのかなと思います。

一方で最後のところで政岡先生がコメントされていましたけれど、これまでの五年間が、いろんなことをやって再開していくプロセスだとすると、これから新しい地域社会をつくっていくなかで、大切な残さなければならぬ文化、取り戻していかなければならぬ文化、そして失われていく文化というものがあるんだと思います。それはどういうものなのか、新しい地域社会のなかで見つけていくところになるのかなと思います。

康先生のお話ですが、まさに作家の活動を通して、新しい新化という地域をみつけていく活動だったのかなと思います。政岡先生のアプローチとは違いますし、危機的というところでは何をというのとはなかなか難しいのかなと思うのですが、まさに波伝谷が五年間で残していくもの、失われていくものというのが徐々に出てくるのと同じようなプロセスが、この新化の活動にもきつとつながっていくのだろうな、そういったことでは、やはり発見をしつつ、それを残していくのか残さないのかというのを地域の人達と考えながら、どうして残さないのか、あるいは、どうして残すのかということを考えていくことがとても重要なことだろうと、二つの発表をきいて思いました。



写真⑧ 南三陸町 2016年3月 高台移転地の新居

場だったというふうに思います。さらに、芸能にかぎらず、危機的状況が地域の文化の価値を発見する機会になっているというのことをすごく感じています。そして、どういう状況が「危機的」で、「発見の契機」なのかというところはもうちょっと考えていかなければいけないと思っています。

最後に簡単ながら発表者の先生方へのコメントということになるのですが、政岡先生とは、10年近く同じフィールドで研究をしています。私は芸能も含めて沿岸地域の研究、政岡先生は別の研究もされていますが、この東日本大震災という場ではかなり同じ場所の研究していますので、政岡先生が発見したオネンブツというものも、地域のなかに本来あったのだけれど、日常的すぎて、その深い意味を波伝谷の人は気が付かなかつたけれど、震災で全てがなくなることによって気が



二〇〇一年以前は、新化は知らない町でした。当時、台湾歴史博物館の呂理政館長の指示のもと、いろんな仕事をするチャンスがあり、そのときから楊達文学館のいろんな状況を見てきました。先ほどの康文榮さんのお話で、歴史的な経緯などいろいろ紹介してくださいましたが、私ども博物館の立場からすると、けっこう変っている所があると思います。

この六〇七年、楊達文学館の人達という話をしてきました。康さんのお話に出てきたのは、自分も含めてボランティアでやってきたイベントです。コンサートや展示会、それに教育劇とか、いろいろなイベントをやっていました。つまり自分の力で、博物館レベルでのイベントや活動をやっていたいたわけです。ですから博物館だけでなく、みなさんがいろんな可能性を試してくれたおかげで、これからも大きな可能性があると気付かせてくれたわけです。康さんは、二十年のあいだにこうした地域の資料を集めてきました。すでに集めていたものだけでなく、いろいろ新しいものもできました。

これらの資料に含まれている歴史は、いろいろと私達の想像力をはたかせてくれました。ですから、そのおかげで、どういうふうにもっと政府側と話し合ったらいいかというようなことにもなれたわけです。ですので、楊達文学館や公開棟などが発見できたのです。この六〇七年のあ

いだでできたわけではなく、それまでの二十年間に地道に資料を集めたりして、ひとつひとつどんな資料があるのか尋ねて歩いたりする、ほんとうに大変な作業でした。

外部からはいつてきた学者が研究するのではなく、現地にいる歴史研究者達や、日本史を研究する人達にやっていただいたわけです。ほんとうに、地域の資料がしっかりしているのです。しっかりしているから、ここでもまた新たな命が生み出されているのです。伝統も守られ、これからどう考えていくかという余裕ももたせてくれました。実は去年になって、もっと広い規模で、大目降文化園区が設立されたのです。これには康さんが大いに貢献してくれました。

楊達の作品『模範村』は、新化の地域について、リアルに描写している作品です。三十年代の植民地の模範村として、リアルな現象を描写してくれた作品であって、この地域が日本に圧迫されたため村おこしをしなければならなかったという内容です。ですから、植民地時代の模範村が、脅迫されるこののない現代においてどのように模範村になれるかというのが、康さんの働きではないかなと私は思います。

また、楊達の新化にたいする思いとか、歌が大好きで、走ることも好きで、先ほどのような走る歌もあるというのが、楊達の考え方や精神をいろんな面に反映していると思います。おもしろい発想だと思います。私は博物館のなかで働いている者です。この二十年間のルートを見てきて、大目降から新化になって、いまわれわれの日常生活のなかにはいつてきて、また社会のなかにはいつてきて、異なる選択、異なる思考を与えてくれました。

康さんや来賓のみなさまも、康さんと同時に考えていると思いますが、新化というのは、民俗

学を研究する際に是非見ていただきたい地域です。今回のフォーラムが、地域文化の発見と活用ですので、新化だけでなく、地域文化の発見をするには、経験論からみますと、地域文化はもともと存在しているわけです。だから、発見、というのは、新たに発見されて、どういうふうに影響力を及ぼしていくかという意味もはいつているだと思います。二十世紀の最後に新化は、いろいろな発展をしてきて、どのように現代に突入するのかというのが、そういうことではないかと思っています。

地域文化を発見するときに基本的な戦略や課題はあると思います。これはいろいろと考えさせてくれます。地域文化に関心をもつて研究するときに、確信をもつて研究するわけです。何かコアの思想をもつて研究するわけです。

政府の部門もそうですし、学術の部門もそうですし、自分にしつかりとした核心となる思想があるから、そういった地域文化を発見し、研究するわけです。でもこういったプロセスのなかで、私達はこういった目的があるとか、どのようにやるとか、もっと深く考えていかなければならないと思います。

私達は地域文化を発見するときに、まず私達が最初に想像するのは何かということを第一段階で考えるべきではないかと思います。まず理解して、それから発見して、なかみの意味合いを発見するというのが一つの大きな課題と私は思います。

地域文化がその地域だけでなく、そのなかに、様々な時代によって、積み重ねているものもあるから、例えば、いま博物館で私達が一つ考えている課題では、フィリピンや東南アジアから台

湾にきて、台湾の人と結婚するときに、発見された地域文化をどう考えたらいいのかという問題です。東南アジアからくる配偶者は特殊なグループですので、こういったグループが発見した地域文化がどのようなものなのかというのも、考えられる課題です。地域文化のなかにはかならず歴史があります。歴史は地方の歴史もあるし、もっと大きな流れの国の歴史もあります。新化の場合、この大きな歴史がどういうものかというのが、先ほどの楊達の模範村の作品のなかにあるような、日本政府に強制されて村おこししなければいけないというようなことではないかな、ということ想起させてくれました。

それで、地域文化が、現在ではなく昔の政府、政権にどう解釈されたか、というのも地域文化の記憶のなかに含まれていると思います。地域文化は現在の形態だけでなく、その歴史的な経緯もともに考えるべきではないか。地域文化を発見するときに、もちろん歴史の材料がいります。歴史の材料は異なる観点から、解釈しなければならぬ。この解釈のものをつかってどういうふうに地方のほうに還元するのか、これはやはり地域を主体として考えていくときに、必ず、考えるべき課題だと思います。

## セッション2 地域文化を保存する

# 宜蘭県大二結の文化遺産の取り組み

## —町の記憶と保存活動

林 奠鴻（財団法人大二結文化大二結文化基金会理事長）

私は宜蘭からきた正真正銘の宜蘭人です。大溪にきまして、駐車場を見つけて駐車しようとしたら、他に車が一台もないんです。みんな路上駐車していました。それで、うちの家内が「駐車場と路上駐車、どちらのほうが安いですか」とスタッフに尋ねました。すると「駐車場が一時三〇元、路上駐車だったら、一時間二〇元」ということで、すぐ駐車場から車を出して路上に駐車したわけです。一〇元の差しかないのですが、こうしたことだけでも、地方文化を扱っている人達の苦勞がわかると思うんです。十元の差だけでも節約しなければならいんです。

私達はいろいろな民間の考え方や価値に直面しなければならいし、政府とも交渉する必要があります。そのあいだに、私達はサバイバルの道を自分で切り拓いていかなければならないのです。そういう意味でも、大二結をこの二〇年のあいだにどう保存し、どう活用しているのかという物語をみなさんにきいていただきたいと思っています。

一九九七年、大二結では千人が地元にある王公廟を移動するという、イベントが行われました。

千人以上を動員し廟を保存するイベントでした。当時は、文化資産をどうやって保存するのかというアイデアはまだ生まれていなかったと思います。いろんな文化資産が壊されたりするような日常のなかで、私達はどういうふうにやっていったのでしょうか。

一九九三年、大二結では王公廟を取り壊そうという計画が立てられました。廟を壊さないと新しい建物が建てられないという話だったのです。私はいまでは、そろそろバスに乗っても無料になるくらいの年齢になりましたが、当時、私はまだ若くて、私達若者は、古い廟は保存したほうが良いと考えました。

文化資産とは何か、文化資産は守るべきものだという観念や概念はありませんでした。しかし、私達はずっと地元で暮らしてきて、この王公廟は、人と人とのあいだをしっかりとつないでくれる役割を果たしていることから、このコミュニティの象徴を是非保存したいという思いがあったのです。そして、コミュニティの象徴があることにより、人と人とのあいだの距離が縮まり、交流も生まれ、街との距離も縮まってくれと、私達は思いました。

まず、保存するための行動を起こさなければなりませんでした。そこで、最初に「コミュニティ発展協会」を設立しました。しかし、この協会は、政治的な手段として使われる傾向が強く、もう少しコミュニティが主体となった組織が欲しいと考えるようになりました。

例えば、宜蘭には日本時代の文化資産がありました。それを保存しようと思ったのですが、その地域の区長は、「歴史的な資産は保存しなければならない。多数が賛成してくれたらもちろん保存します。でも反対する人が多かったら取り壊します」と語りました。

このように、保存する、あるいはしないという判断に、政治的な要素が絡んでくると、ややこしくなってきました。それで私達は、大二結庄を保存するために、コミュニティを主体とする組織、つまり政治的な力や要素を一切排除した組織をつくろうと思ったのです。ですので、新しくつくった組織の規則には政治排除という条文がはいっているんです。例えば、選挙によって選出される議員、それに官僚は、この組織に介入してはいけないという条文があります。政治的な力はいってくと、地域の文化活動に障害が生じる懸念があるからです。

そこから組織は、いろんなイベントや活動を通じて基礎を固めていきました。政府との対話も始まりました。保存計画を実行に移すためには、政府による審査が必要で、どうすれば審査を通れるかなど、行政的な対応能力についても、活動のなかでトレーニングしながら、身につけてまいりました。

保存するためには一般の人間だけでは、その方法がわからないので、専門家との対話も私達の組織がやってきたわけです。例えば、蘭陽博物館や学会の人達です。

もう一つの対話というのが、街との対話です。この廟が存在する私達の街が、どういう街ですか、それを受けどのような行動をおこすべきかという対話でした。

さらにもう一つの対話は、いろんな課題との対話です。自分の主張、自分の観念、そして、どのような主張をみんなにもってもらおうかという対話です。これからのイベントについて、住民達に支持してもらわなければならないので、対話が必要です。

私達が保存したのは、廟だけではありません。二〇年前のかなり保守的な雰囲気の中までは、

みなさんを説得するは大変でした。それでも、まず私達は自分の主張を出さなければならぬ、その主張にもとづいて、自分の価値観を語らなければならないのです。もちろんそれだけでなく、実際の行動も必要です。自分が主張しようとする価値をより広めることも大事です。そうすることによって、一般市民にも私達の価値観を受け入れてもらえる。呂理政館長はよくこのようなことを言います。「発見、そしてサプライズ、感動などを呼び起こすことにより、そこから人びとが自発的に仕事をしようとするのです」。私達の活動においては、実際このような効果が出てきました。

先ほども言ったように、非常に保守的な地方でしたので、古い廟を保存しよう、新しいお寺を建てずに古い所を守ろうという説得はかなり困難でした。そこでまず、地元の小学生を集めて、写生のコンクールをやらしました。その写生の対象として、王公廟と、お祭りを設定しました。写生をするため、小学生は親と一緒にやってきます。「この廟にはどんな神様がまつられているの」など、子ども達は、親にたくさん質問をします。そのようなイベントのなかで、私達の主張を間接的に伝えようとしているのです。

そして二番目は、作文です。おそらく子ども達は、王公廟とはそもそも何なのか分からないので、作文を書くには。家に戻って親に質問しなくてはならないです。若い両親達はおそらくわからないので、おじいちゃんおばあちゃん達にきかなければならないです。それでもわからないことは、お隣やもつとお年寄りにきくなどすることになります。だから作文活動によりコミュニティのなかの共通の話題になります。毎日、この王公にまつわる話をみなさんがいきいたりする

のです。また、この廟を保存しようという動きも地域の話題になっていきます。それで、保存することの価値をだんだんとみなさんが意識するようになってきました。

そして三つ目。保存することに反対するのは地域の長老です。お年寄り、あるいは、廟の管理委員会の人達なのです。なので私達は座談会を行いました。この廟にまつわる話を語るには誰が一番ふさわしいか、それは、もちろん、このお年寄りや管理委員会の人達です。この人達の廟に対する気持ちや感情を、そのような座談会を通して語ってもらえるようにしたのです。そして、この座談会のなかでは、この方々が主役になりました。保存に関することについて、口こそ出さないけれど、心のなかではご自分の重要性を感じとられたはずです。そして感動していたはずです。四年の時間をかけて、そのような座談会やフォーラム、セミナーなどを開催してきました。

最終的に一九九七年には、千人で廟を移動するイベントを成功のうちに開催することができました。地元の八〇パーセント以上の人がイベントに参加してくれました。そういった人達は、おそらく、地域創生とか文化活動といった言葉の意味はわからない、ただし、誰もが自発的に廟を保存しようという気持ちで動いたのです。このようなイベントを通して、文化資産の価値について地元の人達に理解してもらえたのです。その保存の可能性もできました。

そして、王公廟の保存は実現しました。しかし、それを単にそのまま置いておいて標本みたいに見てもらうだけでは十分ではありません。それをやはり生きた文化資産にしてもらいたい。な

ので、そこを地元のコミュニティーセンターとして活用する方法を考えました。例えば伝統的な版画の保存・展示、コミュニティーの成人式、その他、地元にもつわる特別展示を行い、さらには、文化活動なども実施してきました。ここでは単なる建物ではなくて、生きた文化財として運用しようとしていました。

一九九八年からコミュニティーセンターとしての保存活動を行いました。それだけでなく、地方全体の公共事業にも積極的に参加しようと思ってきました。

その頃、二結川の水路が壊されるという話をききました。自分達が生活している環境が変われるという話をきくと、私達も阻止しようと思ったのです。そこで、台湾大学の研究所などいろんな研究機構と一緒にこの水路に関する環境調査を行いました。結果、水路を整備し、その上に歩道をつくりました。

二〇年くらい前のことですが、その頃からは、人を主体とするコミュニティーネットワークの概念を提供していきました。

まず、以前は、町のなかには車が走る車道が中心であるという考え方でしたが、私達が考えているのは、やはり、人が歩く道を大事にしようと、地元の人々が使用する空間を大事にして保存しようという概念を提供しました。一つの計画が、ほんとうに人が必要とする使い方に対応していかないと、意味のないものだと思っただけです。

二番目ですが、地元の植物に関しての保存活動を行いました。

三つ目として、空間の設計は、かならず地元の歴史の記憶と連携していかないといけないとい



写真② 穀倉文化館では地元の米文化の発信地となり、たくさんの見学者を迎えている



写真① 昔から大二結にある穀倉は地元の文化館になった



写真④ 伝統文化を通しての交流が面白い



写真③ まちづくり団体の来訪も多い

記者会見など、公になることをやると、必ずその保存活動が阻害されました。なので、あえて私達は、記者会見は行わずに、極秘で行動してきました。文化資産保存法に基づいて、文化資産保護のためにそれを登録するにはどういった資料が必要か、三週間の時間をかけてこの穀倉の歴史的な価値、建物と地元の住民の関係性などを収集して、県の政府にこれを文化資産として保護するようにお願いしました。結局、迅速に審査をしてくれて、申請も通りましたので、成功してこの穀倉が保存されました。

この穀倉でも、ただの空間だけではなく、活用するために、私達は、いろんな試みを行いました。地元のコンセンサスを、あるいは地元のライフスタ

う概念を提起しました。過去の歴史にはどういうことがあったのか、歴史に関連するものを空間の設計としておりこんでいく、むかしは枕木をつかっていた地域だったので、そういった材料を使うとか、あるいは台車を利用する習慣があったので、台車を展示するとかという考え方です。そして四番目に、人と水路との生活関係を、あらためて考えようということもやりました。むかしのままの、洗濯するときにつかう階段などを再現してみました。

ただし残念ながら、二〇〇六年に内需を拡大するという大きなプロジェクトがあり、地方議員などが、国の予算を積極的にもらおうということで、むかしつくった歩道がこわされようとしていました。そこで、文化資産保存法という法律に基づいて、この二結を文化資産として登録してもらいました。それにより、かろうじてこの景観がまもられたということです。

そういった経験がありまして、二〇〇六年に旧鉄道の空間を歴史的空間として登録し、また二〇〇九年には、二結王公廟を、そして、そこで行っているお祭りを、重要な無形文化財として登録するなどしてきました。先ほどは、千人移廟というイベントがあったと紹介しましたが、千人のなかに、たとえ十人であっても、ほんとうに心から感動したという人が出てくれば文化的な価値は理解してくれるはずです。例えば、数年後に実際会った人ですが、私達の事務所にきて、「地元で昔からあったお米の穀倉が壊される、守れないか」とまったくの一般人が、そういった情報を伝えてくれたのです。文化資産の保存は戦略的に、そして頭脳を使わないといけないのですけれど、私達もこの穀倉をまもるための動きを展開してきました。

実際、当時は、このような穀倉は他にもありましたが、すぐに壊されたところもありました。





写真⑦ 年中行事に登場する食べ物を紹介する展覧会を開催



写真⑥ そして地元の味と記憶に関する展覧会を開催

こういうような感じでお米を知ってもらうとか、昔お米でつくられた料理や食べ物、たとえば、お団子状の料理とか、このお団子がなぜ、お正月につくられるのか、意味はどうなっているのか、こういった感じでセミナーをひいたり、教育したり普及したりしたのです。そうすることによって、現地の生活の経験とか、先祖代々伝わってきた知恵を知ってもらうというような活動もやってきました。お米だけではなく、瓜などの漬物と季節との関係はどうか、この漬物というのは、例えば、太陽とどういう関係なのか、漬物はカビとかにより発酵する食べ物なので、太陽と発酵とのであいだにはどういう作用があるのかといったことです。

漬物はおじいちゃんおばあちゃんがつくる人が多いですが、おばあちゃん達が、漬物から得てきた知恵とはどういものなのか、これは全て後代に伝えるべき生活の知恵ではないかと考えています。

去年、地方の意識を高めるというフェスティバルがありました。祭りには、地方を結合させていくという役割がありますが、このイベントを通じて皆さんの心をもっと結合させていこうと



写真⑤ 地元のお母さんたちに集めてもらい、実作を通して地元料理に隠れている記憶を引き出す

イルを表現する場所として、ここを利用したのです。これは一つの建物としてだけでなく、この建物が歴史的な脈略のなかでどういった位置付けにあり、どういった意味をもっているのか、それを表現しようとしたのです。いろんな特別展示などをおして、地元の文化を、展示していきたいと思っています。

台湾では一部の有形文化遺産は最終的に改装をしてカフェだったり、ショップだったりになってしまったのですが、それではこの建物の本来の意味がなくなってしまうです。そこで、そういった過度の商品化、また一方的な感情の展開を私達はあえてさけようとしています。この穀倉の経営ですが、政府からの補助金はありません。逆に、私達は政府に対してレンタル料をおさめ

もらっていません。経営の負担になっています。私達はどういうふうに現地の知識を構築し、文化の保存に利用していくのかを考えました。そして毎日食べているご飯のことに気付きました。ご飯を食べていますが、お米に関してはどれくらい認識しているのか、毎日お米を食べていますが、いったい生まれてからいまままで、どのくらいのお米をたべてきたか。台北一〇一の高さほどのお米を食べてきたということです。





写真⑨ 昔の写真を展示して住民たちが集まって昔話をする

新しい伝統をつくるということですが、なぜかという  
と、一つの稲穂が、いろんな苦労をかけて、やっとお米  
が実ったわけです。一つの田圃のなかには農民の沢山の  
希望がたくされているわけです。穀倉のなかにもいろい  
ろな物語がはいっています。つまり植物でも田圃でも土地

書類も保存しています。

この伝承や保存を私達は民間組織でやっています。大ニ結王公伝統芸術研究所という組織です。  
もともと台北芸術大学に、傳統芸術研究所があって、ここにも民間として、芸術研究所をつくら  
うと思っていたのです。本当は傳統芸術研究所という名前にしたらいいですか」と神様に問い合わせてみ  
たら、OKというサインを出してくれたんです。ですので、研究所を開所するときには、線香を  
つかったり、太鼓を叩いたりというようなことで開所の  
イベントを行いました。

こうして、研究所も保存するところもできました。そ  
うしたらイベントも必要になってきます。二〇一三年、  
イベントを通じて新たな伝統をつくらう、また時代と  
もにどのように変貌していくか考えようと開催したわけ  
です。



写真⑧ 昔あった紙工場の資料を集めて再現する

いうようなことでした。イベントというのは毎日やってい  
るわけではなく、特別展という枠組みでそこへ参加して  
もらうというような方式です。

大ニ結は、紙の産業が盛んに行われてきました。ここ  
には中興文化園区があります。ここはもともと紙工場  
が、いまは文化園区になっています。この中興の紙工場  
というのは一六〇一七年くらい前に、閉鎖しました。そ  
で私達はこの施設を保存しようと思いました。私達が保  
存するのは小さなものだけでなく、こんな大きな工場  
も保存するというのが責務ではないかと思っています。  
というのは自分の両親がこの紙工場で働いていたので、  
この工場に養われてこんなに大きくなってきたわけ  
です。ですから、こ

の工場が閉鎖するときには、もったいないということから、保存しようと思ったのです。もとも  
とこの紙工場というのは大正時代に設立された台湾製紙株式会社でした。東南アジアではもつ  
も大きな紙工場だったんです。この地域では三人に一人がこの工場で働いていました。ただし、  
時代の変化があって、やむをえなく、閉鎖することになりました。

工場のすべての文献や書類がこの建物のなかに保存されていたわけです。現在、これらを、建  
物のなかで常設展のようなかたちで展示しているんですが、ここでは、モノだけでなく、文献や

でも、建物でもいろんな歴史がはいっているわけです。いろんな生活経験がはいっているわけです。ですので、私達は民間組織ですけれど、やはり住民とともに文化遺産を保存し、新しい命をつなげていきたいと考えているからです。以上です。

\*台湾では、文化財のことは文化資産と呼ばれています。『文化資産保存法』は一九八二年に成立しました。

## セッション2 地域文化を保存する

# 石川県穴水町の文化遺産を保存する ——保存修復の視点から

日高 真吾(国立民族学博物館)

私からは「石川県穴水町の文化遺産を保存する——保存修復の視点から」というタイトルで発表します。

今日の内容は、最初に「災害による地域文化の危機」、二番目に「穴水町指定文化財「明泉寺台燈籠」を巡る活動」、三番目に「明泉寺台燈籠の返却に向けた里帰りイベントと現在の活用状況」という三つの話題から発表をすすめていきます。

## ◎災害による地域文化の危機

最初のテーマである「災害による地域文化の危機」ということについて、まず、その「地域文化を継承するにあたっての危機とは？」という視点で考えてみました。

いくつかの要素が考えられますが、私なりに整理してみると、地域文化を継承するにあたっての危機の要素には、都市化による地域文化の埋没、あるいは、災害からの地域再編を契機として、



地域文化財の展示施設・収蔵施設の被害

地域文化が埋没するということがあると考えます。  
そして、この危機の要素は、結果として、地域が自らの地域文化を忘れ、失ってしまうことにつながり、その地域で生きる人びとのあいだに、様々な摩擦が生じ、地域の生活環境そのものが劣悪化していく要因になると思います。

この点については、先ほどの政岡先生の発表でも指摘されていたことと重複するかと思います。そして、このような事態を引き起こさない一つの手段として、私は、文化財の保存を専門とする研究者でもありますから、その専門家として、地域が自らの地域文化の価値について気づき活用していけるよう、働きかけていきたいと考えているわけです。

私が、このような発想にいたったきっかけは、二〇一一年の東日本大震災をはじめとする「災害による地域再編を契機とした、地域文化の埋没」という危機感でした。

そこで簡単に東日本大震災について振り返っておきたいと思います。東日本大震災は、二〇一一年三月十一日の東北地方太平洋沖地震を起因とした大津波により甚大な被害を受けた災害で、地域の文化を伝える文化財の展示施設や収蔵施設も大きな被害を受けました。このような文化財の被害に対して、全国規模の支援体制が結成され、被災文化財の救出、一時保管、応急措置という活動を中心とした文化財レスキューが実施されました。

文化財レスキューの対象は、日本の文化財保護法によって規定された文化財を中心としつつも、被災地から救援委員会に要請のあったものはすべて、レスキューの対象となりました。

このように、被災地の要望に応えることを第一に考えた文化財への支援体制というのは、日本

の文化財レスキューの大きな特徴であり、国際的にも高く評価できるものだと考えています。

一方で、地域の文化財が被災した場合、それらが元の状態にもどるためには、私は八段階の活動があるのではないかと考えています。

先ほど紹介した文化財レスキューというのは、八段階の活動のなかでは最初の三段階までの活動ということになります。それでは、簡単にこれらの八つの活動内容について説明していきます。

最初の「被災」は、まだ活動が行われていない段階ですが、災害が発生し被害を受けた状況で、何も対処されていない状態を指します。

次の「救出、一時保管」の活動は、文化財を被災現場から運び出し、安全な場所で一時的に保管するということになります。三番目の「応急措置」では、ホコリや泥で汚れたり、壊れたりした文化財が、さらに悪い状態にならないためのクリーンングなどの応急的な処置が行われます。

四番目の「整理・記録」では、救出した文化財の点数を確認

⑦ 研究・活用



企画展の開催  
(国立民族学博物館)

⑧ 防災



免振台の設置  
(中越地震)

⑤ 保存修復



保存修復  
(中越沖地震)

⑥ 恒久保管



恒久保管  
(中越地震)

七番目の「研究・活用」は、それまでの「整理・記録」、あるいは「保存修復」の過程で行われた専門的な研究活動を取りまとめ、その成果を公開する活動になります。

八番目の「防災」ですが、ここでは支援活動全体を通して得られた教訓を活かし、次の災害に備えるための活動が行われます。

これらの活動を経て、被災した文化財

③ 応急措置



応急処置作業  
(中越沖地震)

④ 整理・記録



整理・記録  
(佐用町水害)

① 被災



地震で倒壊した鉄燈籠  
(能登半島地震)

② 救出・一時保管



被災文化財の救出作業  
(東日本大震災)

するとともに、リストを作成し、その全量を把握する作業が行われます。

五番目の「保存修復」では本格的な修復が必要と判断された被災文化財に、専門家が保存修復を行う作業になります。

六番目は「恒久保管」です。この活動は、被災した文化財を、復旧した博物館や所有者に返却する、または博物館などに預けて安全に保管する活動です。





能登中居鋳物館



直径約1.2mの塩釜



明泉寺台燈籠

このなかで穴水町では、けが人が三九人、避難者が最大一三七人となり、家屋等の全壊を含む損壊が九三〇棟の被害ができました。

「明泉寺台燈籠」は被災して、完全に台座部分が倒壊し、破損していました。この状況を受け、穴水町から、文化財の保存修復を目的とする文化財保存修復学会に支援要請が出され、学会から燈籠の修理設計や修理費用などが提示されることになりました。

この計画をもとに、穴水町は二〇〇七年度に保存修復の予算を計上し、修理設計等を監修した私が、所属する国立民族学博物館で修復の指導を行いながら、修復後の復元に使用する支持体の設計、製作などを研究支援する体制が組まれていきました。

が、平常時の状態に戻ったということになると私は考えています。

#### ◎穴水町指定文化財「明泉寺台燈籠」をめぐる活動

それでは、次に本題である穴水町指定文化財「明泉寺台燈籠」をめぐる活動について話を進めていきます。

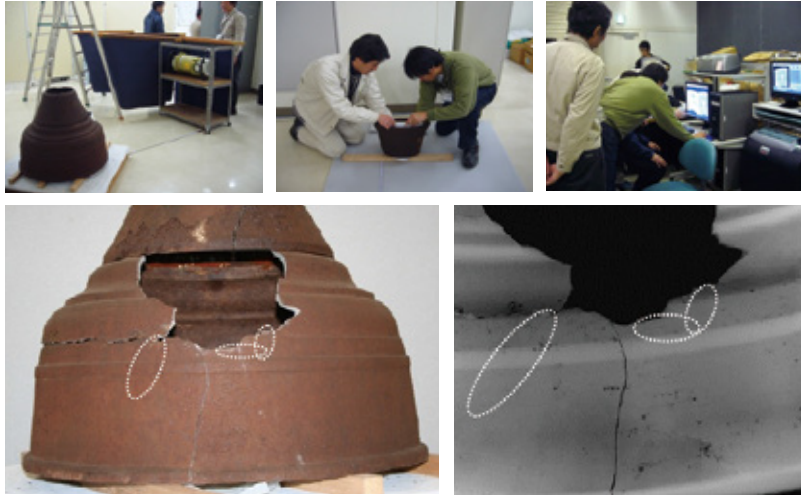
穴水町は、石川県能登半島にあります。現在の人口が約九千人弱という町の規模です。一八八九年から周辺の村同士で合併を繰り返し、一九五五年に現在の穴水町ができました。現在は農林水産業が主な産業であり、カキ、ナマコ、メバル、クロダイなどの水産物、スイカ、クリなどが特産品となっています。

この穴水町の集落のひとつである中居という地区は、古来、鋳物を産業とし、江戸時代には周辺の地域でさかんに行われていた製塩業で使う塩釜を製造し、大いに発展しました。

しかし、周辺の鋳物の産地が発達するにつれ、次第に衰退し、一九二四年には鋳物の生産は行われなくなりました。

今回の発表の主役となる「明泉寺台燈籠」は、中居鋳物の傑作として、一九九五年に町の文化財に指定され、現在、能登中居鋳物館に展示されています。

さて、この燈籠が、能登半島地震で被災してしまいました。能登半島地震は、二〇〇七年三月二五日に発生した地震です。人的被害としては、死者が一人、重傷者が八八人、軽傷者二五〇人の計三三九人。住宅は二万九三八二棟の被害がでています。



X線透過試験による資料の損傷状況確認

つまり、先ほど紹介した被災文化財の救済活動のうち、文化財レスキュー後の活動となる五段階の活動を「明泉寺台燈籠」の保存修復を通して、試みようとしたわけです。

一つ目に行った保存科学調査では、保存修復に必要な知見を明らかにする為の活動として、八つの活動を行いました。

まず行ったX線透過試験では、資料の破損状況を観察して目に見えない亀裂を確認し、どの部分が強度的に弱いのかということ把握していきました。

次に構造観察を行いました。ここでは、製作年代、構造観察および、重量測定をしました。その結果、この「明泉寺台燈籠」は、一八六四年に製作され、左側の燈籠が三九〇キロ、右側の燈籠が三六九キロの重量で、宝珠、笠、笠飾り、火袋、四つからなる受竿、台座という構造であることがわかりました。

「明泉寺台燈籠」を製作した中居鋳物師の実体を明らかにすること。

三つ目は、穴水町が継続的に管理・活用できるための活動を、研究活動を通して企画すること、というものです。

これらの研究活動は、二〇〇八年から二〇一〇年の三年間をかけた研究プロジェクトになりました。



被災した明泉寺台燈籠

その後、本格的な作業準備を整えていくなかで、保存修復に関する研究支援活動を充実させるために、穴水町、文化財保存修復学会、国立民族学博物館で連携して研究活動を展開する体制を構築していきました。

この「明泉寺台燈籠」の保存修復を支援するための研究活動は、ここに記した三つの内容を柱としております。

一つ目は、保存科学調査を行い、保存修復に必要な知見を明らかにすること、と、

二つ目は、文献調査を実施して、「明



防錆剤の除去



オリーブ油の塗布



破損箇所を矯正



破損箇所の復元



復元火袋の木型



復元火袋の鋳造

めとしては、伝統的に精製した椿油が使用されてきましたので、このような不乾性油にも注目して、錆止め剤の選定実験を行いました。

その結果、椿油など、伝統的に使われてきた不乾性油でも、十分に錆止めの効果が得られることが実証できました。

そこで私達は、使用者が安全に使用でき、比較的安価に購入できる精製オリーブオイルを使用することにしました。

以上のような、保存科学調査の結果を活かしながら、「明泉寺台燈籠」の保存修復を行いました。

保存修復では、以前に施された防錆剤の除去、精製オリーブオイルを用いた錆止め処理、破損箇所の矯正および接着復元の作業を中心に行い、合わせて被災前から失われていた右側の燈籠の火袋を復元していきました。

さらに保存修復とともに、「明泉寺台燈籠」の支持体の製作も行いました。



「明泉寺台燈籠」の構造観察

また、破片を用いて、燈籠本体の鉄の組成分析を行いました。分析結果から、「明泉寺台燈籠」は、高品質な鋳物製品であることが実証され、当時の中居鋳物師の技術が、とても高かったことが明らかになってきました。

処理方針を決めるにあたり、最初に「明泉寺台燈籠」が返却される能登中居鋳物館の環境調査を行いました。その結果、能登中居鋳物館では、緻密な空調管理が

できず、くわえて、海辺の近くに立地していることから、錆が発生しやすい環境にあることがわかりました。また、窓から日光はいることから、紫外線などの影響を受けやすい環境であることもわかってきました。

このことから、錆止め処理の効果が、長期間は得られない可能性が高いことが明らかになりました。

そこで、地元で中居鋳物の文化を継承している、中居鋳物保存会の方々の力を借りながら、返却後の「明泉寺台燈籠」の管理を継続的に実施するための、錆止め剤の選定を行うことにしました。文化財の錆止め剤では、アクリル樹脂がよく使用されます。一方、日本の大工道具などの錆止



最後に、この三年間の研究プロジェクトを終えた、「明泉寺台燈籠」の返却に伴う里帰りイベントと現在の活用状況について紹介していきます。

返却するにあたって、「明泉寺台燈籠」のプロジェクトを含む、これまでの被災文化財の支援活動をテーマとした企画展「歴史と文化を救う」を国立民族学博物館で二〇一〇年に開催しました。この企画展では、地域の歴史や文化の記憶を留めた文化財を救出し、あるべき姿にもどして

#### ◎明泉寺台燈籠返却に向けた里帰りイベントと現在の活用状況

このことから、中居では鋳物師間同士で修業が行われていたことが明らかになって、中居鋳物の品質が維持できた背景がみえてきました。

一方で、このような交流による技術の平準化というものが、技術力の停滞を生み、他の鋳物師集団に市場を奪われる契機となり、一九二四年の廃業にいたったこともわかってきました。尚、廃業後も中居鋳物の技術は、土などを巧みに扱う左官業として受け継がれていたということもわかりました。

また、「明泉寺台燈籠」を製作した吉岡宇衛兵という職人が、中居の有力な鋳物師である小林佐兵衛のもとで、中居の集落にある日吉神社の大型の鉄燈籠の製作に参加していたことがわかってきました。その経験を活かして、「明泉寺台燈籠」の製作には責任者として携わったことが明らかになったわけです。

生産基盤を整えてきたことが明らかになりました。



「明泉寺台燈籠」は、X線透過試験の結果からも、強度が著しく損なわれていることが明らかになっていました。また、「明泉寺台燈籠」が何故倒壊したのかということを探るため、二分の一の大きさの模型を地震発生装置の上に置き、どのように倒壊したのかを検証しました。その結果、この燈籠は、地震の横揺れに弱い構造になっていることが明らかになりました。

そこで、燈籠の内部にこのような支持体を設けて、各パーツにかかる過重負担を軽減する工夫をしていきました。くわえて、床面に直接設置できる免震台の上に燈籠をのせて展示することで、次なる地震にむけた対策をとったわけです。

このような保存科学調査に加えて、文献調査を取り入れ、中居鋳物師の実体にせまりました。

ここでは、これまでの先行研究をあらためて検証するとともに、中居鋳物師の子孫の家に伝えられてきた古文書の調査を行いました。

その結果、中居地区は一四世紀から有力な鋳物師の家を中心に、その



製塩体験



鋳物体験

そして、「明泉寺台燈籠」がいよいよ能登中居鋳物館に返却されるのですが、そのときには盛大な式典が開催され、除幕式が行われました。

また、穴水町の地域文化の基礎をつくった中居鋳物を、どのように継承していくのかについて、町民のみなさんと座談会を行いました。このときの座談会では「能登中居鋳物こども教室」の経験を活かしながら、地元の子どもを対象とした文化継承を、学校や教育委員会、そして中居鋳物保存会で協力しながらやっていこうというところが、話題の中心となりました。

統文化子ども教室」の予算を得たこと、穴水町教育委員会が積極的に企画運営に関わってくれたことで、実現することができました。

ワークショップは次のようなメニューとなりました。中居鋳物の歴史的背景を知るために、中居鋳物の歴史がわかる紙芝居の紹介や、集落に残る中居鋳物を見学する歴史散策、中居鋳物保存会が継承する「たたら唄」の指導を行うとともに、中居鋳物を支えた塩釜が実際に使用されていた揚げ浜式塩田での製塩体験、鋳物製作の基礎的な知識を得るための講義、疑似的な鋳物体験、および実際の鋳物製作の体験といったことを実施しました。



企画展「歴史と文化を救う」開催 国立民族学博物館 2010年7月～9月

次世代に引き継いでいくことが、災害からの復興へと向かう人びとの心の支えになることをしめました。

展示内容は、被災文化財の支援活動が日本で最初に行われた一九九五年の阪神・淡路大震災から二〇〇九年にいたるまでの活動について、実際に被災して修復された文化財を展示しながら紹介しました。

次に、「明泉寺台燈籠」を地元に戻却するにあたってのプレイベントとして、「能登中居鋳物こども教室」というワークショップを穴水町で開催しました。

私は「明泉寺台燈籠」のプロジェクトを実施している三年間、調査のために毎月一回、穴水町を訪れ、中居鋳物保存会の方々といろいろな話をする機会をもちました。このときの話のなかで、「明泉寺台燈籠」の返却にあたって、中居鋳物の歴史的背景や文化的継承のために、特に地元の子ども達に、中居鋳物の文化を理解してほしいという強い要望があり、その話をきっかけに、ワークショップの企画を立案し、その内容は、これまで行ってきた調査結果をもとに整えていきました。

そしてこの企画は、文化庁の地域文化支援のための補助事業「伝



鋳物ワークショップ



製塩ワークショップ



ボラマチャグラの体験

見する試みとなった事例としても紹介しました。この活動を通して三点ほどの気づきを得ています。

一つは、このような活動は地元の方々が、自らの地域文化の価値を再発見する機会が必要であり、さらに自分達で、その地域文化を活用し、継承していこうと考えてもらわなければならないということです。

そしてこの機会は、私達研究者が積極的に関わることで、十分に提供できるのではないかと現在考えています。このことは、私達研究者が、単に自分の関心だけで、その地域の文化を研究するのではなく、研究で得られた結果を、地域に還元する機会にもなっていくのではないかと考えます。

そして、このような活動は、研究者と地域が双方向性の関係性を築いていく一つの手段になるのではないかと考えています。

次に、地域文化を活用している実践者の活動については、その意義をきちんと評価するシステムが必要かと思えます。このような活動というのは一人で行えるわけではなく、いかに周りが応援できるかということが、非常に重要ではないかと思えます。

そのような支援ということについても、研究者の立場から、積極的にアプローチできるのではないかと考えています。

#### 返却を記念した式典と座談会



除幕式



座談会

そして先ほど紹介した「能登中居鋳物こども教室」のなかから、鋳物体験と製塩体験を中心としたワークショップが、現在も能登中居鋳物館で行われています。

このワークショップは、穴水町の小学校の卒業記念として行われるとともに穴水町からの移住者が多いことで姉妹都市となった、山梨県南アルプス市との交流行事としても行われています。

鋳物ワークショップでは、学校の校章を鋳物でつくってストラップにし、製塩ワークショップでは、つくった塩をストラップの小瓶に入れて持ち帰ることができます。

このような経験をもとに、現在は新たな試みとして一九世紀から続くボラマチャグラによる漁業体験もワークショップとして行われています。

以上、二〇〇七年の能登半島地震で被災した「明泉寺台燈籠」の保存修復活動を通して、鋳物という文化を軸とした「地域文化を保存する」というアプローチの事例を紹介しました。

また保存を通して行った調査が、中居鋳物の文化を再発

最後に、ここで紹介したようなワークショップは、ただ楽しむことを目的とすると長続きはしないと考えています。できあがったものを、ただもらえるということを目的とするのではなく、参加者の知的好奇心を満足させるような目標を明確に設定し、その目標を達成するための仕掛けづくりを考えなければならないと思っています。この点についても、研究者と地域の人びとのあいだで、共同で鍛えあげていくことができるのではないかと考えています。以上で終わります。

## コメント

### 許 主冠（台湾城郷特色發展協會理事長）

黄先生は、地域文化の保存に関して日本の考え方と台湾の考え方は若干違うとおっしゃいました。私の考えでは、日本は、地域文化の保存に関しては、災害時にどう保存すればいいのかについて実践としてやっています。一方台湾は、まだ想像の範疇にとどまっています。もしそういったことが、発生したらどうしたらいいのか想像しながら考えているのが現状です。地域文化の保存について、台湾にはどういった問題があるのか、私はもうすこしマクロ的な観点から、先ほど林先生が紹介した論に補足的な説明をしたいと思っています。

まず、文化に対する権力の影響についてお話ししたいと思います。次に権力の流動性をどうつくりだせばいいのか、そして、三つ目に、これからの文化はどういったかたちで新しい局面をもっていくのか、この三つをお話したいと思います。

最初に、権力に関することですが、台湾は外来的な権力によって主導されてきました。過去に植民されて、あるいは移民がはいつてくる時代がありまして、一九八五年以降は工業化、現代化などの段階を経てきましたけれど、そういった権力の体系は、上から下にどちらかという巻き込まれていったようなかたちであったかと思っています。

そういった環境のなかでは、自ら反省する、自ら意識するようなこと、そういったチャンスが



少ないのです。ですから、台湾の人達は自らの文化をないがしろにしてきたというのも事実で、それに対しては、私達も、ある程度は仕方がないと思っています。

長い歴史のなかで、政治的な統治、あるいは官僚体系の統治、あるいは資本家による統治、呼び方は何でもいいのですが、いずれにしても、台湾は外部からの力によってコントロールされていたのです。そして、人びとは、自分の生活への感受性を徐々に失ってきたのです。

一九九〇年代から台湾はだんだんと民主化してきました。当時の人びとは民主化に対して、過去のフレームを壊すようなことしか想像しませんでした。しかし、徐々に私達はどんな人なのか、どういったところに住んでいるのか、私達の生活はどういったものなのか、そういったことを考えるようになりました。

そして、このような従来の構造を打破することで、生活、経済、政治など、いろんな面で変化が見られるようになります。今日ここにいるみなさんは、夜八時以降に人がいなくなるという生活をおそらく体験したことがないと思います。いまは、夜八時あるいはもっと遅い時間に町に出てもコンビニなどお店の明かりが灯っています。そういう光は、私達に温かみをもたらしてくれます。ある意味過去の生活とはとても対照的な生活習慣になってきました。

昔、文化資産は、上の人で決まります。その価値も上の人が解釈するのです。しかし、先ほど林先生が説明したように、宜蘭では、上の人ではなく地元の住民が、自分達が生活する環境のなかの解釈により価値認定を行ったのです。

博物館もそうです。地方レベルの博物館はどういった価値をもっているのか。おそらく昔の人

が思っていた博物館と、いまの私達が考えている定義は違うと思います。その定義の変化も、ある意味、過去の概念を覆すプロセスなのだと思います。

文化遺産に対する専門家や役所の人の考え方と地元住民の考え方は快々として一致しない場合があります。それでは、文化遺産の価値をきめる資格は、誰にあるのでしょうか。

地元の人なら誰もがもっている大切な生活の記憶や価値は、地元に住んでいない役所の人や上の人達では感じとれない場合が少なくありません。地域文化の解釈、そして保存は、いまの台湾はまだ模索している段階です。私達は、将来どうあるべきなのか、まだまだその手法を探っているところなのです。

そして、私が話したいことの二つ目は、権力の流動性です。この場所は誰の場所なのか、この場所の価値は誰が定義すればいいのか、そして解釈をした後の責任は誰がとればいいのか。

民主化というのはやはり再構成が非常に重要です。いままでのものを壊してしまうと、再構成することが必要になってくるのですが、再構成する人は、そのあとの責任も負うべきなのではないでしょうか。これが、台湾が民主化していくプロセスのなかで考えなければならない問題なのです。

民主化するプロセスのなかでは、地方が、例えば大溪なら大溪学ということがさかんにいま討論されてきましたけれども、その地方学というのが最近非常に盛んな観点になっています。ただしそれは、単なる地域の文化的資料、歴史的資料を集めるだけではないのです。それは新たなムーブメントなのです。住人、あるいはその地方に対して関心をもつ人びとが、自身の経験あるいは知識体系を有しつつ、みんなとともに共同で一つのシステムを構築しようとするのがこの地方学



なんです。そういったことは過去に例のないことです。現在私達がやっていることは、全部ゼロから模索していかないといけません。これは、私が思うには、権力の流動性の第一歩だと思っています。昔でしたら、各分野の専門家や学者が、定義をしたり、価値認定をしたりするのですけれど、そのような作業のなかでは、一般庶民の生活経験はあまり認められません。そうすると、このような研究は、一般庶民の側からも注視されず、記憶から離れてしまい、共同の記憶ではなくなってきます。なので、いまの段階では、地方学というものは、権力の流動性を生み出すものだと思っています。

それでは、今後誰が地域の知識あるいは、地域に関することを担うべきなのでしょう、例をあげて説明したいと思います。大溪のとなりの三峡です。ここは有名な画家李梅樹先生の故郷です。先生が亡くなって記念館が建てられました。私達もそこを訪ねました。

一番印象深かったのは、その博物館のスタッフが文句ばかり言っていたことです。例えば「政府からの援助が少ない」、「地元の人が李梅樹先生のことにあんまり関心をもたない」など、いろんなクレームを言っていました。

そして二〇一一年から、このようなクレームばかりの状況が徐々に変わっていきました。彼等からすると「李梅樹先生は、三峡に対してたくさん貢献してくれたのに、なぜみんなは、感謝してくれないのか」ということだったのですが、地元の芸術家が李先生を記念するイベントを自発的にたくさんやるようになったのです。

地元の芸術家は、李梅樹先生の作品をプリントして。店などで展示したりしました。もちろん

博物館のスタッフは非常によろこんでいました。李梅樹先生の作品が非常に注目されるようになりました。そして、同じアーティストの仲間が、作品を評価し、自ら進んでやってくれることを彼等はよろこびました。そして、二〇一四―一六年までの三年間、政府からの補助金は減りましたが、イベントは逆にどんどん大きくなりました。政府は、毎年申し訳ないと思っていますけど、補助金が増えることはありませんでした。

李梅樹先生は、三峡の炭坑、山、自然、社会的な景色を描いていました。ですから、みなさんはこれらの作品を通して、地元の歴史や生活の研究を始めました。最初は単なる芸術祭だったのですが、最終的には、一つの地方の文化発展の契機になっていきました。私は、どちらかというと楽観的な見方をしています。現在はたしかに、まだまだいろんなことを模索して、成熟していないですけど、沢山の可能性が見えてきたと思います。

末森 薫（国立民族学博物館）

## ◎文化財科学の役割

私は日高先生と同じ国立民族学博物館で研究員をしております。ふだんは博物館資料の保存に携わるほか、中国西方の仏教遺跡を対象として、文化財科学の手法を取り入れた考古学・美術史の研究もすすめています。

最初に、私が専門とする文化財科学という分野が、地域文化の保存においてどのような役割を担っているかについて、私の考えを少しご紹介させていただきたいと思っています。

私が考える文化財科学の役割を二つあげたいと思います。一つは、「保存」を目的とした研究・調査です。これは、文化財の材質や構造を調べたり、保存修復に用いる材料を検討するなど、資料を保存することを主目的とする研究・調査です。もう一つの役割としては、「評価」を目的とした研究・調査というものがあるかと思っています。これは、物自体が持つ情報を歴史的、地域的な視点から捉える、あるいは科学的な手法を用いて文字情報などを引き出す研究・調査です。「保存」「評価」の両方の役割を合わせることによって、地域文化のもつ価値の新たな発見につながっ

てくるのではないかと考えます。

## ◎地域文化の評価に求められる調査

次に、さまざまな制約の中で保存や評価をおこなうことが求められる「地域文化」の調査について、四点ほどポイントをあげさせていただきます。

一つは非破壊による調査です。資料への負荷を最小限に抑えて調査をおこなうことは、地域文化を継承していく上でも不可欠なものと考えます。もうひとつは、簡便かつ安価で行える調査です。人材や予算に限りのある地方では、場所や人を問わずにおこなえる方法が重要になります。また、現場に携行できる機器を用いた調査も必要になるかと思っています。研究施設などでは、さまざまな機器をもちいて、精度の高い調査をおこなえますが、現場に持つていけるものは限られます。そして、正しく情報を解釈するために、再現性のある調査も求められるかと考えます。

これらのことを鑑みて、私は光学的な手法を用いた調査に取り組んでいます。ここで、その調査方法を簡単に紹介したいと思います。通常われわれが目で見ている光は、可視光の領域です。光学調査では、可視光よりやや長い波長をもつ近赤外、同じくやや短い波長をもつ近紫外の領域の光を用いて、可視光では得られない情報を得ることができます。図1は、光学撮影調査の模式図です。私が用いているカメラは市販されているもので、比較的安価に手に入れることができます。近赤外線画像を取得できるように、少しだけ改造してあります。光学調査では、近紫外、



チベット（西藏）版木  
（国立民族学博物館所蔵）

光源：白色（可視光）偏光  
受光：反射光  
加工：グレースケール、画像反転、  
レベル補正

図2 チベット版木1 光学撮影調査事例



チベット（西藏）版木（国立民族学博物館所蔵）



光源：白色（可視光）  
受光：拡散光（反射光除去）  
加工：無

図3 チベット版木2 光学撮影調査事例

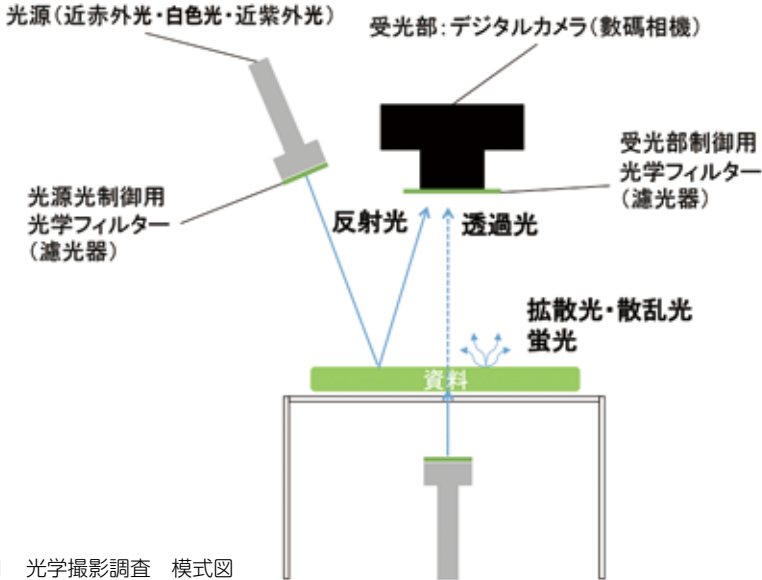


図1 光学撮影調査 模式図

ここで、地域文化を包含する資料を対象に行った光学調査の事例をいくつか紹介したいと思います。図2は、国立民族学博物館が所蔵するチベットの版木です。版木は紙に刷ることを目的として制作されたものですので、彫られた文字はそのままでは読めない、あるいは読みにくいです。ある研究者の方より、彫られている文字を読むために紙に刷りたいとの要望がありました。刷り直しをおこなうには、版木に墨などのインクを塗布

白色光（可視光）、近赤外の各光源を照射し、資料表面で反射した光、資料表面で拡散した光、励起された蛍光、資料を透過した光などを受光します。撮影方法や条件を変えることで、資料から異なる情報を得ることができます。

する必要があります。資料自体の損傷につながることを懸念されました。そこで、反射光を撮影する方法を用いて資料の凹凸の差を画像として取得し、文字を読めるように加工を行いました。図3も同じく版木です。下の画像は、資料表面の反射光を除去し、拡散光を受光する方法で撮影したものです。この画像から、文字が書かれている部分にだけに墨あるいはインクを用いていた痕跡を確認することができます。資料がどのように使われていたかを知ることができました。

図4は、大阪の吹田市にあるお堂に飾られていた絵馬です。永らく外部の環境に置かれていたので、絵の内容が見えなくなっている箇所があります。この絵馬に紫外光を照射し、紫外光によって励起した蛍光を撮影したところ、絵の内容が見えやすくなりました。また、図5は、新潟の十日町で発見された「屏風包紙文書」です。この資料には、地域の歴史を物語る貴重な情報が記されていますが、紙が重ねて貼られていたり、文字が重ねて記されているなど、読めない文字がありました。資料を透過した光を撮影する方法を用いることによって、文字が読めるようになりました。これらの事例では、光学調査を通して、版木や絵馬、包紙文書がもつ価値の再発見、再評価につながったと言えます。

#### ◎地域文化の保存と人びとの関心

最後に、お二方のご発表に対してコメントをさせていただきたいと思います。

お二方のご発表では、地域文化を保存するうえでの課題として、災害やで都市化があげられてい



銅板製絵馬（大阪府吹田市春日地蔵講蔵）



光源：紫外線（極大波長：375nm）  
受光：紫外線蛍光  
加工：グレースケール化、レベル補正

図4 銅板製絵馬 光学撮影調査事例



屏風包紙文書（新潟県十日町市  
縮問屋加賀屋無木家蔵）



光源：赤外線（極大波長：850nm）  
受光：赤外線透過光  
加工：グレースケール化、レベル補正

図5 屏風包紙文書 光学撮影調査事例

ました。それらにくわえ、地域文化を保存する上では、人びとの「無関心」が一つの脅威になるのではないかと考えています。地域文化の保存をすすめていくには、地域の人びとの力が必要になってきます。地域文化に対する人びとの関心を向上させるためには、地域文化財のもつ価値の再評価や再発見が重要になります。再評価や再発見を通して地域文化財に対する人びとの関心が芽生え、それが地域文化の保存や継承活動につながっていくのではないかと考えます。今回、お二方のご発表はそのサイクルが非常にうまく継続的に連鎖しているように感じました。

林先生のご発表では、はじめに都市化によって古い建物が壊されてしまうという危機から、建物自体の存在価値を見直そうという活動が開始され、それによって人びとの関心が生まれて、地域の人々によって建物の保存が行われていきました。さらに建物が保存されることによって、建物時代が地域コミュニティの場になり、建物の価値が新たに付加され、人びとの関心を呼びました。現在では、ボランティアの数もどんどん増え、新たな価値を創造する研究所もつくられ、保存・活用・評価のサイクルが連鎖していることが確認できます。

日高先生のご発表されました穴水では、災害により燈籠が着目され、地域の貴重な文化財を残そうとする機運が地域の人々に生まれ、結果として、保存修復に繋がりました。また、保存修復をおこなうための材料調査にて、灯籠が非常に高品質な铸件であることが分かり、また、再度の文献調査を通して、灯籠が非常に重要な価値を有することが判明しました。そして、再評価を通して、さらに人びとの関心が惹き、展示や子ども教室、ワークショップなどの活用に転じていきました。ここでも保存・活用・評価のサイクルが継続しており、地域文化財の保存が継続して続

けられていました。

お二方にご発表いただいた内容は、保存・活用・評価のサイクルが継続的に実施されており、地域文化を保存する上でのひとつのモデルケースとなるような事例ではないかと考えます。





久多の花笠踊



久多宮の町松上げ

重要無形民俗文化財「久多の花笠踊」、そして、京都市登録無形民俗文化財として、「久多宮の町の松上げ」と「久多の山の神・お弓」があります。一方、有形の民俗文化財として、京都市登録有形文化財「久多の山村生活用具」があります。この「久多の山村生活用具」は、三件の無形民俗文化財とも連携していて、重要なものです。

「久多の花笠踊」では紙で作った花を男性が手にして踊ります。八月二四日の夜八時頃からはじまって、一二時過ぎくらいまで続きます。この紙でできた造花をつくるのも男性、演じるのも男性ということで、現在も、これをつくっている空間には女性は一切入れない、そしてこの花に触れることもできないということを守っています。

次に「久多宮の町の松上げ」です。久多には五つの地区があり、その中の「宮の町」というところで守っている行事です。「とろぎ」という大松明<sup>たいまつ</sup>ですが、ここに各自がつくり、持ち寄った松明を、「あげまつ」といって運動会<sup>たいまつ</sup>のときの「玉入れ」と同じように、火のついたたいまつをほうり投げ入れる、一番に入れた人が、一番松という名誉を得ます。

### セッション3 地域文化を活用する

## 地域資料展示と大学との協同作業の可能性

### —京都市登録有形民俗文化財

### 「久多の山村生活用具」の展示を通じて—

伊達 仁美（京都造形芸術大学）

京都市左京区は、南北に長い区であり、その中で久多は最北端に位置しています。

久多は、中世には「久多荘」とよばれ、京都と若狭とを街道でつなく、交通の要所でした。そして、平安時代から室町時代にかけての一〇〇〇〜一三〇〇年前後までは、「山の荘園」として非常に栄えていたところでした。荘園は、貴族や寺院・神社などの私的な領地で、その多くは、田や畑ということになっているのですが、木材が貴重な材であった当時、久多は「山の荘園」として、とても繁栄しました。

#### ◎久多の民俗文化財

そこで、久多の民俗文化財についてですが、無形、有形ともにあります。無形では、国の指定

な産業は林業で最近までさかんに行われていました。

### ◎京都造形芸術大学の活動

京都造形芸術大学では、「民俗文化財を活かした地域活性化に取り組むため、調査・記録・展示などを通じて、住民および広く市民に認知していただく」ことを活動の目的としています。

久多の山村生活用具の変遷についてですが、登録文化財になったのは、いまから三〇年程前のことです。それらを次の世代に伝えるため、資料の再構築することになりました。当時は約二〇軒それぞれのお宅で収蔵されていました。また、地元の方により、小規模の展示場である、「久多郷土文化伝習館」というところで約百点の民具が展示されました。その久多民具伝習館が閉館されることを機に、新たな保存や活動につなげるべく今回の資料の再構築を行いました。

活動の結果を公開するため、二〇一四年には「民具が語る山と里の暮らし／久多の山村生活用具」という展示をしました。そして二〇一五年度には、「写真にみる久多の民具と伝統文化／久多の山村生活用具其の二」という展示をいたしました。一年目の展示では、それぞれ学生達が展示解説を行い、来場者達からも情報を得るという活動をしました。そして二年目の展示では、講演会を催しました。民俗芸能の研究者である山路興造先生が久多の無形文化財、そして、私が久多の有形文化財ということで講演しました。

展示場は、かつては中学校だったところです。久多は、もともとそんなに人口の多いところではなかったので、教室は四つしかありませんでした。三階建てで、一、二階が職員室など、一、



久多の山の神・お弓



久多の山村生活用具

火が入ると、きれいに燃えて、あとは倒すという行事です。これも「久多の花笠踊」と同じ様に、松上げをしている空間は男性だけのものです。女性は少し離れたところから観ます。

そして次が「久多の山の神・お弓」という行事です。当番神主といって一年ずつ交代で神主になった方が矢を射って当たったところで、その年の豊作もしくは吉凶を占うという、毎年一月二日に行われる行事です。

そして最後が、「久多の山村生活用具」です。展示室は、廃校になった中学校を利用しています。その三階部分を、この「久多の山村生活用具」の収蔵庫にしています。また、一、二階は、高齢者の福祉施設にもなっています。

京都市登録有形民俗文化財「久多の山村生活用具」五六三点は、この地域で日常的に使用されてきた、衣食住、農耕、漁撈、それから林業に関する道具などからなります。この辺りでは、昭和四十年代、西暦でいうと一九六〇年代くらいまでの長いあいだ、家族が着る麻や綿の着物、その家の女の人が織ってつくられていました。さらには、主

二階が、そういった高齢者のための部屋なのですが、三階は何もなされておらず「空いているよ」ということだったので、ここに民具を集めて収蔵展示をすることにしました。

一年目に公開したときに、これらの道具を使ったことがある人達の話を知ったということで、来て下さったお一人お一人からお話を聞きました。

そうするといままでわからなかったモノの情報が、とてもよくわかってきました。私達は集めるときにも、聞き取り調査をしながら集めてはいますが、限られた時間で収集するため、そんなに沢山の情報を得ることができません。その結果この展覧会に来て下さった地元の方々とお話ができただけは、資料に情報を付加することにとっても役立ちました。

写真展では、花笠を飾りました。それぞれの町内で特徴のある花をつくっています。

展示する写真は久多を物語る写真ということで、学生達を選びました。写真をみながら、みなさんに語り合っていたくということもいたしました。

二〇一六年度は二回展示をいたしました。二〇一六年度のプレ展示ということで、一〇月一四〜二八日の約二週間にわたり、写真展「久多の山村生活用具其三」を左京区役所の一階ロビーにて開催いたしました。それから一月一九、二〇日に、同じ写真展を「久多いきいきセンター」で開催しました。これが「写真にみる久多の暮らしと文化」で、プレ展示ですから「こういうものがこんどありますよ」ということを、みなさんにお知らせするための展示ということになります。

会場の区役所ロビーは、年中無休で開いています。朝の八時から夜の九時まで。土曜・日曜も



活動の結果を公開

三階が教室ということ  
で、まだ教室のあとが  
残っているのですが、  
一、二階は、現在「久  
多いきいきセンター」  
という高齢者の福祉施  
設になっています。で  
すから一階が、おじい  
ちゃん、おばあちゃん  
達が週に何回か来て、  
体操教室をしたり、談  
話会をしたりという部  
屋になっていて、二階  
は皆さんが集まったと  
きにカラオケ大会や食  
事会ができるような舞  
台になっていて、畳の  
部屋もあります。一、







昔の道具の聞き取り調査 左京区久多

ベースをつくるということをしました。

民俗文化財というのは同じようなものがたくさんあります。ですから、それぞれに情報の付加が必要であるという事です。

また学生達と「昔の道具の聞き取り調査」という活動をしました。おばあちゃん達が集まられるときに学生が行って話を聞きます。先方にとって当たり前の道具が、学生達からすると何もわからないものなので、いろんなことを教えて下さいます。と同時に、一点の資料からどんどんと情報が出てくるわけです。「これを使ったときにどうだった」とか、「これを使ったときに長男が生まれた」とか、「自分がお嫁にきたときにどうだった」とか、話がどんどんはずんで、皆さんの方でも笑顔になるんです。そうやって集めた情報を道具に付けていくという活動をしました。これは、教育的にも、学生

オープンで、区役所に来た人たちが必ず通る場所です。

私達がいらないところで実物展示するのは防犯も含めて危険なので、麻の糸をつくったときに入れる桶一点、それと麻の繊維だけを施錠できる展示ケースに入れて、展示しました。

次に、活用に必要な資料化についてです。ただ古いものを集めるだけではありません。古いものを集めて、それを活用していくためには、やはり資料化をしないといけないわけです。同じものでもいつどこで誰がという情報があるのが民俗資料の価値です。ですから活用にはモノだけでなく、情報が必要ということです。民俗資料の必須情報ということで、5W1H、「名前はなんというのか」「いつ使われたのか」「どこで使われたのか」「誰が使ったのか」「何のために使ったのか」そして「使い方はどうなのか」など、これがなければ、ただの古い道具、もしくは古そうに見える道具にしかならないわけです。ですからこれを京都市の登録有形文化財として、民俗文化財として後世に伝えていくためには、このような情報が必要なのです。ただ古いからということでもここにどんどん入れておこうというのではないわけです。

去年調査を行った事例ですが、京都市の有形文化財になっている酒造りの道具があります。そこも指定を受けてから三〇年くらいたっているのですが、指定をうけた文化財としての意味がわからずに、古い社員さん達が「これも古そうやらあそこに入れておこう」といって、どんどん使わなくなった古い道具を入れこんで、最初は文化財の収蔵庫になっていたところが、三〇年たった現在、いったいどれが文化財で、どれが文化財ではないただの古い道具なのかということがわからなくなってしまう、所有者としても困られていました。そこで、資料の調査とともにデータ





都市には公立の歴史民俗資料館がありません。そこで、学校で民俗資料を保存することが重要となり、学区の特徴が資料にあらわれるわけです。学区の特徴といいますと、先ほど左京区の地図をしめして説明しましたとおり、南北に長く、山間部の小学校では山の道具、住宅地では農具、都会部分である南の方では、町の暮らしの道具がのこっているわけです。これらの調査から、展示に工夫をすること、授業だけではなく、地域の皆さんも活用できるのではないかと考え、モデルケースとして、行った事例を紹介します。京都市立明徳小学校の「明徳小さな博物館」です。私達が最初に調査をしたときには、資料が雑多にモノがおかれていまし

達のコミュニケーション能力や、探究力、発見、発展させる力が向上するということにもつながっていました。

#### ◎学校や地域における活用事例

次に、学校や地域における活用事例をご紹介します。大学が左京区にありますので、こちらも左京区の事例になりますが、先ほどお話しした通り左京区は南北に長い地域で、北には、半分以上を占める山間部があり、中央あたりに住宅地があり、南のほうには商業地が広がるというのが特徴です。左京区には京都市立の小学校が二二校（調査当時）あります。この二二校のなかに、どれだけ地域をものがたる資料が収蔵されているかということ調査しました。

調査の目的は、日本の小学校教育では、三年生もしくは四年生で「昔のくらし」ということを学びます。まずは身近な昔のくらしからはいっていくわけですが、小学生に「昔」という概念を教えるとき、日本の教育ではいまから五〇年く六〇年前をさします。「昔のくらし」について尋ねたときに、すぐに答えてくれるおじいちゃん、おばあちゃんがまわりにたくさんいるということです。学校のなかには、その授業のために、「昔のくらし」で使った道具を保存しているところがあります。左京区の場合、二二校のうち一八校に道具が保存されていました。小学校に残っている民俗資料というのは、狭い校区で使用されたものであり、博物館の学芸員や研究者が恣意的に集めたものではないので、地域性がより顕著にでます。

日本では数年前に大きな市町村合併があり、その結果地域の博物館施設が減少しました。京



クリーニング



展示棚および収蔵庫の製作



学生も協力



公開日当日には多くの地域の方が訪れた。

た。私どもの大学は芸術大学で、いろんな学科があります。私は民俗文化財の保存修復を専門領域としていますが、そういう保存修復を学ぶ学生と、空間演出デザインという、博物館での展示デザインを学ぶ学生が中心となって取り組むことにしました。

板の間には、囲炉裏がありました。しかし、囲炉裏は、明德小学校の校区である左京区岩倉の地域では、ありません。岩倉では囲炉裏ではなく竈を使います。小学校の展示では、第一の目的は授業で活用することです。それで、「囲炉裏は完全にふたをして塞いでもいいですか」と小学校の先生に尋ねたところ、「囲炉裏は教科書に出てくるので、そのときにはみせないといけないから、授業のときには見せることができるようにしておいてください。」ということでした。そのため、木のふたをして、展示をしました。

また、空き教室の利用には少し条件があります。少子化の影響で、空き教室ができ、それらを利用して民俗資料室にしたところが多いようです。ただ、あくまでもこれは少子化によって余った教室を一時的に利用したものです。ですから、生徒が増えていくと、また元のように教室に戻さないといけません。だから大きな改装はできないわけです。

保存修復を勉強している学生は資料のクリーニングや、錆び止めなど資料保存を、空間演出デザインを学ぶ学生は、展示のレイアウトを行いました。そして私たちの活動には地元の皆さんにもご協力いただきました。小学校の卒業生である大工さんは、棚や格子戸などを作って下さいました。学生たちも大工さんの指導の下、木材の塗装などを行っていました。

そして公開日当日には、地域の方、約二百名が来館し、実際に使用したことがある年代の方々

は、資料を手にとって思い出話を語り合い、若い世代や小学生に対しては、道具の使い方などを解説していました。以上、地域の資料を保存するため、学生たちが学んでいることを生かす取り組みとその事例を紹介しました。

### セッション3 地域文化を活用する―2

## 博物館のあり方としての「共学」

### .. 大溪の地域参加型博物館を例として

陳 倩慧（桃園市立大溪木芸生態博物館館長）

大溪の博物館の運営手法、それに準備段階から現在推進しているものまで、さまざまなプロジェクトについてご紹介したいと思います。

博物館が正式に開館した際に手書きの絵が公開されました。その絵のなかには大溪にとって非常に重要な川、大漢溪がえがかれています。

大溪は、この大漢溪の東岸に位置する町です。昔から、海のいろんな恵みが川を上ってやってきました。一方、大溪からは、こちらで栽培したお茶や樟脳、炭、木工芸品などが川を下り輸出されていきました。また新竹地方への川沿いの重要なルートのひとつとなっていました。大溪は流域の一番内陸に位置している町で、絵では、その特徴をできるだけ表現しようと努力しました。

開館以来、地元の方々は絵を大変気に入ってくれて、地元関連の展示を続けてやることができました。大溪は小さい町ですが、たくさん文化資産があります。百年ほどの歴史があり、有形、無形ともにたくさん文化資産を蓄積してきました。有形文化資産においては、三十箇所くらい



写真① コア館となったのは、日本時代に作った警察の官舎。これは修理前の様子

しい現代的な建築物をたてようという計画もあります。新しい建物をつくるか、別の手法で運用するか、一時期議論されました。こういったディスカッションを経ることで、いろんな課題がみえてきました。そして、この官舎を保存するだけではなく、どのように活用するかという課題がでてきました。大溪では古い街並みを守って現在活動を二〇年間やってきましたが、この間、建造物に関しては、あまり関心もたれませんでした。大溪にきたら、美味しいものを食べたり、いろんな古い街並みを見たりするだけになってしまっていたのです。

本当は、私達は博物館をつくりたいのです。大溪には、昔からあった生活文化が古い街並みのなかに佇んでいます。そして、大溪だけではなく、復興区や三峽区の方にもっと広がっていくことで、大溪のビッグエリアになっていくのです。ですから博物館は大溪だけではなく、この生態

のエリアを含まなければならない。つまりこの端から三峽まで、全部のエリアを含まなければならないと私達は考えたのです。したがって博物館ではなく、生態博物館というところから出発したほうがいいのではないかと考えました。自然景観とか、無形文化遺産とか、もちろん有形も含まれますが、ここの住民の生活文化、コミュニティの発展を博物館の運営理念にとりいれなければならないと考えました。

二〇一三年に、まず大溪の宝箱を製作しました。この宝箱というの、いろいろな地域に関する物語です。物語というのは、

の歴史建造物があり、そのなかには、国指定の有形文化資産もあります。また無形文化資産としては、お祭りも指定されています。

無形文化資産のなかでも、伝統工芸の木工が有名で、木彫産業もとても重要です。いま大溪では六人の職人が国に認定されています。一九九九年と二〇〇七年にいろんな調査をしました。が、博物館が開館するに際して、もう一度調査をしました。現在、木工に関する会社は一五〇社くらいありますが、以前は、もっとたくさんありました。徐々に減ってきたということですが、私達博物館にとっては、木工の保存は、重要な課題となっています。

また大溪は、大二結と同じように、二十年くらい前から、地元の住民が文化資産の保存に参加するということを盛んに行っていました。

和平通は日本統治時代からの街ですが、そして中山通、中央通など三つの古い街並みが残されています。地元の女性、あるいは子ども向けのイベントも沢山計画されていて、とても活発なコミュニティだといえるでしょう。

休日になると数多くの観光客であふれています。ただし、このように観光客があふれる景色は、ほんとうに地元の人が望んでいる風景でしょうか。市民のみなさんがもう一度考え直す時期がきました。

二〇一二年、日本統治時代の警察官舎を歴史的建築として登録するかしないかというのが課題になりました。おそらく一九〇一年から四一年までの四〇年間使われた官舎で、私達は保存したかったのです。警察官とその家族が住んでいたところです。もちろん老朽化して、取り壊して新



が多いのですが、それらを修繕するのはかなり難しい作業になりました。博物館に入場してもらうことで、大溪という地域を認識してもらって、それと同時にいう機能で使われているのかという認識を深めてもらうことができます。もともと家屋は人が住んでいるだけでなく、公共の空間として使われているものも少なくありません。それで、三月二八日、正式に博物館が開館しました。まず公開されたのは、「壺号館」です。もともとは大溪小学校の校長先生の宿舍でした。日本式の建物で、二〇坪くらいの広さです。生態博物館を運営していくには、やはり住民とともにやっていくべきだと考えています。ですから校長先生の宿舍を壺号館にしたのです。

今年の一〇月二一日に、第二期として三つの建物もオープンしました。いまでは、八カ所が常設展の空間として開放されています。

大溪の歴史や人びとの生活文化を日本の建物の中で展示するには工夫が必要であることに気付きました。地元の人びとのストーリーをどう展示するか、あるいは別の建物で語ってもらうか、地元住民はどういったかたちで参加すればいいのかなど、多くの課題がありました。

「街角館」を推進する時、一番肝心なのは、博物館とのパートナーシップをどうつくるかということです。住民が自ら自分達の生活、昔に関する話を語ることを主軸にしています。そして、自分や家族がもつものを整理してみてもいいました。地元の方々に対して博物館がもっている知識を提供する博物館に対して地元の方々が昔のこと、生活文化などを教えてくれました。お互いが交流する、大溪では、このようなパートナーシップで運営され、街角館の所有



写真③ 街角館の参加者と一緒に文物資料の保存方法を議論する



写真② 四連棟と呼ばれる宿舍群、修理後は常設展の場所として使われている

それまで二〇年間やってきた文化の保存ではなく、これからの二〇年をどのように活動していくのか考えるためのイベントです。ですから、多くのみなさんに集まってもらい、住民達の次のステップとして、どうしていききたいのかというイメージを考えてもらったのです。

この二、三年の討論を経ることによって、博物館をつくるのであれば、住民参加型にしなければならないということまで一致しました。私達が得たコンセンサスは、例えば、民家や、古い店などについては、公共空間として市立博物館の一部になってもらうという考え方でした。地域の知識、生活の記憶、それから、いろんな地元にある審美的なコンテンツがそのなかにはいっています。博物館のホストは館長ではなく、住民になっているのです。

二〇一五年、桃園の文化局のもとに、「街角館」とよばれるプロジェクトが始動したわけです。

博物館といっても、新しい建物が建ったわけではなく、古い街並みのなかで、古い建物を修繕し、博物館になってもらうことからスタートしました。歴史的な建造物は日本式のも

者が博物館と一緒に運営方法・管理方法を模索していきます。このようなことをわれわれは「共学」といいます。

街角館は、地元を紹介する情熱をもっている人でないとできません。そして、第二の条件として、空間を所有していること、そしてその空間を利用して、自分の物語を沢山のひととシェアする意欲をもっているということです。博物館からは少ないですが、街角館に補助金を提供しています。そしてストーリーや空間の整理、また教育活動の企画にも、私達はサポートしています。

街角館の各館長は、もともと使命感の強い方々です。そしてその使命感や責任感がますます強くなってきました。街角館と博物館は全く違うものです。街角館では、それぞれ自分の生活や生業を中心に、生活を表現する一つの方法として自然にそこに生きた歴史を展示しています。

自分達が所有する既存の文化、生活を気付かせる、それらを表現する方法を自ら模索して実現していくということです。したがって、とても個人的な表現手法になっています。また各展示には、交流館の企画と街角館での企画とを連携させることも可能としています。

収蔵品ですが、博物館がもつものと街角館がもつものとの二つの部分にわけています。デジタルアーカイブを通して、これがいま博物館にあるのか、地元の街角館においてあるのか一目瞭然にわかるようになっていきます。

街角館は最初四軒でしたが、いまは一六軒になりました。古い通りだけでなく、川の西側にも一軒あります。そしてもうすこし山奥にはいったところにも三軒あります。

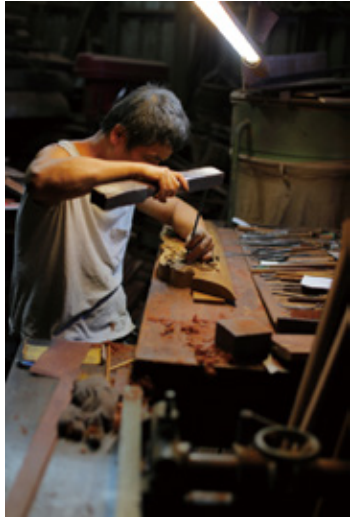
街角館の種類は、最初に木工品を扱うところがほとんどだったのですが、徐々に範囲も広がっ

てきて、地元の古い旅館や楽器屋、そして工具を扱う工房も街角館の一つになっています。

そして、いままであまり使われていなかったコミュニティセンターを、若い人がいろんな活動を考えてくれるようになりました。さらに獅子舞の団体です。それも街角館の一つです。地元の人が関羽の誕生日を祝うために自発的に組んだ獅子舞の団体がありました。その他に、ビジネスマンによる団体もあります。そういった異なる人達による団体も関羽の誕生日のときには、お神輿とか巡行など、一緒にお祭りを盛り上げようとしていて、二〇一一年には桃園市が無形文化資産として登録しています。このような文化には、百年ほどの歴史があり、参加する個人や組織が三十くらいありました。いま、参加する若い人が少なくなっているのが問題です。関連するものの流出も一つの問題です。こうしたお祭りが続けていけるかどうか、私達博物館も関心をよせてきました。

私達はいくつかの手法により、地元の人びととともに、この祭りをふたたび元気にさせようとしてきました。私達は調査研究あるいは映像記録などを、いろんなアプローチにより実施してきましたが、やはり地元住民の参加が重要です。私達も補助金を提供することによって、組織が自らもっている資源を整理するように促しています。

現在、住民のみなさんは文化の重要性、そして過去、自分達がどんなに重要で特色ある文化を失ってきたかを意識するようになりました。百年の特別展示、これは二〇一六年七月からですが、使っていた道具を、そして、自分達が過去にどんなことをやってきたのか、そのストーリーを語ってもらい、そして若い人に参加を促すような試みもしました。毎年の発表目標も自分達で探して



写真⑤ 地元の木家具産業を蘇らせるのは、博物館の仕事でもある

物語を理解することになりました。

私達は、さらに職人の調査を続けました。いまは六五歳から八〇歳のあいだの職人の調査も行っています。職人にストーリーを語ってもらいたい、特に、年をとった職人が語るストーリーは、若手の職人の師匠がストーリーを語ってくれていることになるわけです。そして、職人の物語館をつくりました。職人の作品が展示されていますし、そのなかには、百人の弟子をもつような有名な師匠もいました。また、いまでも木製品をつくり続けている方もいます。

週末になると、弟子や継承者が、寺のなかで使っている神輿をどのように作ってきたのか、その作り方をみせて、住民達あるいは一般の方にも体験してもらう。さらには神輿の作り方だけではなく、作っている職人のストーリーも知ってもらう。この人は普通のおじさんのように見えるけれど、じつは沢山の後継者がいて、木工芸に多大な貢献をした人なんだというように霧囲気を作り出したのです。もちろん技術も継承してもらわなければなりません。継承していくにはどうしたらいいのか、そこで、若者達を養成してグループをつくってもらいました。

博物館の立場から、専門家を発見し、そこで実務的な指導や交流を行ったのです。



写真④ 街角館を紹介する特別展を開催する

きました。博物館はどちらかというと、傍らでサポートしていく役割です。そして、文化を伝承する一助となれどと考えています。このようなイベントはまだ生きています。お祭りは続けて行われています。お祭りの前には、教育推進のイベントをやって、お祭りのなかみをより深く認識してもらえるようにこころみました。

もう一つ重要なのは木工芸です。職人が徐々に亡くなり、まだ二〇〜二五軒くらい木工品のお店がありますが、こちらもだんだんと少なくなってきました。この木工品をいかに現在の生活にふさわしいものにしていくのかという転換も重要です。地元住民とともに木工芸を盛り上げることも私達の重要な役割だと考えました。

そこでまず、木工芸の職人の現状を調査することから始めました。すると、八〇歳以上の職人が少なくなっているという状況がわかりました。その研究成果を先ほど紹介した官舎で展示しました。職人のストーリーをBC館というところで展示し、職人の子孫達も、自分の先祖代々の

元のかたちを保ちながら、住民の精神をどのように残していくのか、私達も考えたわけです。ただ修繕するだけでなく、物語をしっかりと建物の中に残すということを行ったのです。デザインは変えても、ライフスタイルをそのまま残していく、だから、それぞれの建物で、それぞれのライフスタイルが見えてくるのです。

開幕式には一〇四歳、九八歳の長老が参加してくれました。さらにいろんな特別展も開催いたしました。これらの特別展の全部が大溪の住民と深く関わっているのです。

いるので、これをプラットフォームにして、そこに関心をもってくれた人達を集め、さらに展示空間を使って、もっと人を集めて、活動がさらに広がっていくような考え方です。この空間というのが新しく建てられた博物館の空間のなかではなく、やはりこの地域に根付いた建物のなかで行われているわけです。そこから、ライフスタイルと結合させたイベントがどんどん生まれてくるのです。

博物館は、日本時代の建物をコア館として使われています。そのため、博物館は人が住んでいた空間なので、自分の物語をもっています。昔、どういうふうに生活していたのか、それについても研究し、展覧会を開催いたしました。

日本時代の建物には、日本の方ではなく、台湾の方が住んでいたわけです。修繕するときに、



写真⑥ 博物館と地元の人々と一緒に伝統の祭りに因んだ大溪芸文祭が行われる

博物館が地域に存在すると、やはり住民と密接にならなければなりません。先ほど関羽の廟で行われているイベントを紹介しましたが、それに関わる三〇のグループのリーダーと博物館が、どうともに仕事をしていくか、どのようにイベントをやっていくのかを模索しながらやってきたわけです。

大溪は、木工品が中心の産業になって



## コメント

平井 京之介(国立民族学博物館)

### ◎文化としての博物館

私は社会人類学が専門で、いろんな研究をしているのですが、そのなかで今日するお話は、博物館人類学といわれる領域のものです。この博物館人類学が何かというのは、いろいろな定義がありうるかと思うのですが、一つは、博物館が文化を展示するときに、どのように展示しているのかということを考えます。このときに重要になってくるのが、権力の問題です。特に展示している側と展示されている側とのあいだに、力の不均衡、不平等がある場合、多くは、展示されている側の人々が弱い立場にある。それが、どのように展示に反映されているかを考える。二つ目の定義としては、もう少し広い意味で、博物館というのは、ふつう一つの建物のことを指すわけですが、それだけではなくて、文化を保存したり、変容したり、社会のなかでいろんな機能があるわけです。そういうものも含めて研究の対象とする場合もあり、広い意味での博物館人類学、私のある国立民族学博物館では文化資源研究というような言い方もします。

三つ目の博物館人類学のあり方ですが、今日、私がお話したいことの一番のポイントでもあるのですが、博物館の活動そのものを文化として考えるという見方です。どういう意味かというと、

台湾には台湾の博物館のあり方、運営の仕方があるのではないか。タイにはタイのあり方、運営の仕方、歴史がある。こういう見方をしていくわけです。タイにはコミュニティー博物館というのが千以上あります。タイの博物館には、もちろん国立の立派な博物館もありますし、県立の大きな博物館もあるのですが、それとは別に、村の小さな博物館があります。ほとんどが、村の寺院の片隅にあります。これをコミュニティー博物館といいます。みなさんご存じだと思いますが、タイは非常に仏教のさかんな国で、それぞれの村にお寺があり、そのお寺の一角に博物館があります(写真①)。



写真①

すごく面白いのは、その博物館は、お寺の一部として運営されます。ですから当然ともいえますが、展示の内容は仏教に関する物が多いのです。仏像や教典とか、そういうものが中心になったお寺の博物館なわけです。これはすごく面白い。タイ独自の博物館のあり方だと思えます。それで、このような博物館が何のためにあるのかということですが、コミュニティーのアイデンティティを作り出していく、というのが一つ一番大きなものとしてあります。もう一つは、仏教そのものの復興のためというのがあります。最近、若者が仏教に熱心ではなくなったので、その傾向を変えるために、こういう博物館を設けているというのがあります。

それから、すべてではありませんが、多くの博物館が考えて



### ◎マイナスの地域文化

次にお話するのは日本の例です。水俣病というのがありました。六〇年ぐらい前に起きた事件ですが、ある企業が排水のなかに水銀を入れていて、その水銀に汚染された魚を食べた人が病気になるという事件でした。

事件があったのは、九州というところの水俣という地域です。現在の人口は、二万五千人くらいですが、事件があった当時は五万人くらいいました。ここに海がありまして、町のまんなかに



写真②

いるのは、博物館を作って、村に観光客を呼び込もうということです。この村に人を呼び込む活動と関連しているのが、タイで非常に盛んなのですが、一村一品運動です。日本でやった活動を取り入れているのですが、それぞれの村で得意な物を一品つくって売っていいということなんです。これは政府が支援してやったのですが、それぞれの村に自分達の特産品ができたわけです。織物であったり食べ物であったり、いろいろなものがあるわけですが、それを博物館で展示して、来たお客さんになんとかそれを買ってもらおう、そのもののすぐれた点を宣伝しよう、そのような活動にも利用されています（写真②）。

大きな工場があります。この工場が出した汚い水が海を汚染して、多くはまわりに住んでいる漁師がその魚を食べて病気になったという事件でした。

この事件についてお話していると時間がなくなってしまうので、今日私がお話したいのは、あるNGOの話です。これは、水俣病で被害を受けた人びとを支援するためにつくられたNGOです。メンバーは、地元の人ではなくて、東京や大阪から集まって来た若者でした。一九七四年の設立以来、現在も活動を続けています。

彼らは、最初は裁判をやったり、座り込みをやったり、被害者を助けるために、政府に補償金を要求したりとか、そういう活動をやっていたのですが、それがある程度一段落したところで、最近何をしているかというところ、水俣病の経験を伝えるという活動をしています。

ここで僕が言いたいのは、地域文化はプラスのものだけではないということです。マイナスのものも、悲しいけれど地域文化である。それを伝えていくことも大事である。あまり大きな声では言えないけれど、それを伝えることによって、ある程度人にきってもらって、まちづくりに役立てることもできる。そういうことなわけです。

このNGOは博物館を作りました。といっても手づくりです。もともとここでキノコを栽培していました。栽培がうまくいかなかったので、こういう博物館にしました。これがその展示です（写真③）。まったくの手づくりです。

あまりきれいなじゃないですし、暖房も冷房もありません、それに観にくいですが、でも、お客さんがくると、スタッフ達が出てきて、一生懸命解説してくれるのです。ものすごく力を込めて解

広い意味での博物館活動の拠点になっているんですね。概要を説明し、そのあと町へ繰り出して  
いって、いろんな出来事を紹介する、そういうような活動をしています。

### ◎関係を構築する

時間がないので、続いてコメントをさせていただきます。

三つポイントを言いたいと思います。お二人の先生のお話のなかにできたことですが、  
主体が住民というのは当然のことだと思います。一番重要なことだと思います。でもそのときに  
忘れてはならないのが、住民達だけではまずいということだと思います。外部からきた人との交



写真③

説してくれます。自分達が何をしてきたかということ語って  
くれます。このときに、僕がかもしれないと思ったのは、彼等は  
東京とか大阪から助けたいということであって、被害者を助けること  
によって、いろんなことを学んでいく、人生について学んでい  
くという経験をしてきたわけです。そういう人達がいま、水俣  
病を語る、自分達の経験を語ることをしてる。活動は博物館  
の展示だけではなくて、たとえば、講演をしたり、修学旅行の  
ガイドなど、外から来た人に「ここでこんな事件がおきました、  
こんな文化がありました」と水俣の町を案内したりしています。

流があつて、はじめて、物語ができるんだと思います。参加する、一緒にやるのが学ぶことに  
つながる。それを共学という言葉で、おっしゃってましたが、ひとつ大事なことで考えます。

もう一つは、違う立場の人が一緒に活動することによって相互に理解ができるということ、  
例えば、ひとつの地域の人であっても、同じではない。地域のなかにもいろんな人がいる。そう  
いう人達が一緒にやることによって相互に理解することができる。たとえば伊達先生の説明のな  
かにあった、学生さんと、地元のお年寄りが一緒にやると、それぞれが学べるだけではなくて、  
お互いのことが理解でき、そこに関係が生まれる。

三つ目は、こういうことをやるときに一番問題になるのが、持続性ではないかと思ひます。陳  
先生のお話のなかに、討論会をやったりお祭りをやったりすることが、よいコミュニケーション  
のプラットフォームになり、それを継続していくことができるということがありましたけれ  
ど、そういうときに重要な役割を果たすのは行政だと思ひます。行政が住民とどうやってやっ  
ていくかということが、重要なのではないかと思ひます。

どうしてもお金はかかります。ある程度、自分達で財政を獲得することも大事だと思ひます  
が、お金儲けだけを考えると、大切な文化や技術の伝承からは離れて、そればかりになっ  
てしまふ。そうするといつかどこか違ふところへいつてしまふのではないかという心配がつねに  
あると思ひます。

私は博物館学を研究しています。ですので、博物館が地域文化の保存、活用、発見において、いったい何ができるのかをみなさんとお話したいのです。博物館は重要で、それからパワフルな道具としてつかわれていると皆さんは認識していると思います。しかし、地域の文化を保存していくときは、公立でも私立でも行政的な部門からいろんな支援は受けています。また、こういった地域では、基本的にはパブリックを対象に開放していると思います。地域文化をパブリックに開放するというのは、単なる場所ではなく、もっと高い関心をもちあう場所として、ということではないかと思うのです。

お互い関心をもち合うことによって、新たな学習能力が生まれてくる。それがないと、社会的な脈略にかなりの差が出てくると思います。台湾と日本のあいだでは、交流が頻繁に行われています。お互い、理解しているように見えますが、そうではないという感じもします。日本では、一九五〇年に文化財保護法、翌一年には博物館法というように、法令が作られたわけです。しかし台湾では去年です。この法令の内容から見てもみますと、両国の法令の目的や規範の範囲はそれほど差がありません。しかし、これまでの話、特に平井先生の話のなかでは、博物館での事業というのは一つの文化であり、博物館の仕事とは、文化的な思想や考え方がはいつているという

のがありました。ですので、それぞれの地域の生活のなかで、どういう役割をはたしているのか、日本と同じような博物館法はありますが、この法律によって博物館がどのように台湾で機能していくのか、これを考えなければならぬと思います。

日本では文化財や博物館に関連する法律が発効してから五〇年が経ちました。それで、民俗学的な資料の収集や整理など、全部を博物館の職員が専門職としてやってきました。林先生の話では、台湾でやっていくのはミッシェンインポッシブルのような感じ、いろんな技をつかっていかなければならない、また、地域の文化の保存は、有識者たちが中心にやっているという様なイメージがあります。日本ではモノがあるから、そのモノから発想するのですが、台湾の方ではその物があまりなくて、何を主体としてやっていけばよいのかわからないし、日本の多くの地域にあるような民俗資料館もありません。

日本では、文化財は博物館、資料は民俗資料館がそれぞれ担っているという感じですが、でも台湾は少し違います。台湾で地域文化が検討されるようになったのは、やはり戒厳令の解除以降です。いろんな拘束や制限がなくなったので、それから、一般の方が地域文化の保存や発見という仕事を担っているというような感じになっています。もちろん、そこには、個人的な感情などがかかりはいつています。公的部門が大量に資金を投入したり、あるいはマンパワーを投入したりするというようなことは、台湾にないように思います。制度面ではすぐプロフェSSIONナルな運営の仕方ですが、個人的な感情とか思いがわりとかかわってくるのです。

博物館がパブリックに開放するだけでなく、個人的な思いに関心をもつためには、もっと高い

レベルにはいっていかねばならない。何か話したり、言葉の練習をしたりしてもらうだけでなく、そこからもう少しエネルギーやパワーをもらうためには、公的な部門のパワーが必要だと思います。そこからプロフェッショナルの力が必要になってくると思います。

台湾の博物館法ができて以来、もともとあった個人的な思い、つまり民間のレベルと政府レベルをどういうふうに結合させていくかがこれからの台湾の課題だと思います。

#### セッション5 大溪における実践事例と活動の実態

### パブリック・ヒストリーを主軸とした地方史

#### —大溪木芸生態博物館の四連棟常設展

溫 欣琳（桃園市立大溪木芸生態博物館収蔵展示係）

現在私達がやっている常設展示と大溪との関連性についてお話したいと思います。

昨年の一〇月二日に、大溪木芸生態博物館は開館しました。そして、こちらの博物館は、展示だけではなく、いろんな活動もしています。イベントをつねに企画し続けている博物館なのです。

たくさんさんの言葉でこの博物館の特徴を説明することができると思いますが、一番重要なのはこの博物館の中心は大溪に住む人びとだということです。

大溪には、たくさんさんの興味深い人がいました。そして現在大溪に住んでいる人達は、みなさんにきてもらえる、また将来も、みなさんに参加してもらえることを期待しています。

この博物館は、二〇年間の地域づくりの基礎のうえに誕生しました。二〇一二年に日本時代からあった警察官舎を政府が歴史建築として登録しましたが、それまでも地元の人達は、古い建物を利用して博物館あるいは展示館に使いたいと考えてきました。こちらの博物館のイニシャル

展示がつけられました。常設展は、大溪の町をテーマとしてやっていますので、周りの自然環境などを含めることはなかなかできません。常設展示は、とにかく大溪という地域の入口として、簡単な紹介のみを展示し、詳しいことはその場所に足を運んでもらうというかたちをとりました。

常設展示では、大溪の発展の経緯や、台湾で大溪はどういう位置付けなのか、あるいは、大溪という地方はどんな価値観をもたしてくるのかというようなマクロ的な歴史を展示のメインテーマに据えたわけです。その一方で、大溪の町の住民がどんな生活を送ってきたのかというミクロの歴史については、それぞれコーナーをつくりました。

自分の家族の歴史を展示することをテーマとして作り上げました。二〇一五年には、街角館で生活展をひらきました。生活展とは、自分の家のなかのものに、どういう物語があるかを展示するもので、大溪の人達の物語を教えるという展示でした。大溪にはお祭りに関する社頭文化というのがありますが、本当に町のもので、町の人達と深く交流しないとなかなか資料が手にはいらないとか、深い内容を知ることができないという感想がありました。

そこで、先週の日曜日に、社頭文化の特別展をひらきました。この展覧会は、社頭文化を知ってもらおうという意味があります。社頭をどのように保存していくかも考えました。

博物館というのは何か目的があって設立されるわけではなくて、手段としてつかうものだとは感じました。博物館をつくることで、まわりの人間を巻き込むような感じで町づくりもしているわけです。四連棟の常設展示で、いろんなテーマがあり、現在が完成形ではなくて、これから構築し続けていくというイメージです。



写真① 博物館のボランティアは常設展で来館者を案内する

はWE、つまり私達の博物館です。この博物館は、館員だけが企画したり、博物館をつくったりするのではなくて、みなさんに参加してもらいたいという意図を込めています。もちろんコミュニケーションも一方的ではなく、住民の方との密接な関係が必要です。一般的な博物館は、政府が運営しているものと考えられていますが、この博物館は地元の人との徹底した話し合いによって運営しているというのが特徴です。

よく私達はボランティアの方々と話をします。多くのボランティアのみなさんが情熱的に参加してくれますし、ほんとうに感謝しています。そしてガイドツアーをしているときには、ボランティアの人達は必ず、「私も大溪の人です」と自己紹介しています。中心はあくまでも大溪の人です。

四連棟とよばれている建物のなか、常設





写真④ 大溪の長老をインタビューして  
常設展で放送する



写真③ 町の人々と一緒に町のことを調  
査する

す。大溪においては重要な老舗です。そういうお店も博物館で紹介しています。

次は文化に関わる人びとの紹介です。大溪には沢山の人が住んでいて生活を営んでいます。文化・芸術に尽力した人もたくさんいました。亡くなりましたが、台湾の有名な歌手、鳳飛飛もこちらの出身ですので、重要な文化的な象徴として彼女を紹介しています。また、学校教育のコーナーもあります。

そして出口を通ると、後ろの建物へとつながっていきます。主に戦後、ここに住んでいた人達は、家族がふえたので増築しました。したがって後ろの部分が増築された部分でした。ここでは二つのコーナーをもうけています。一つは木工芸で、特徴的な工芸品や技術を紹介しています。そして、大溪の人達による物語のコーナーです。これは、常設展示のなかの特別展示という位置付けですが、九四歳のおじいちゃんが彼自身の物語を語っている様子などを紹介しています。彼の話のなかにも大溪の木工芸の話にもつながっている部分がありますので、そういったコーナーを設けています。またその隣で



写真② 四連棟の昔の住所標識。博物館になっ  
てからもそのまま残る

これは、次のプレゼンターが紹介する源古本舗という店で

これから四連棟についてご紹介します。私が博物館に勤めはじめたころには、かたちとしては既に現在の状況にちかかったのですが、昔の四世代の建物がつながっている感じでした。その後、博物館のニーズにあわせて、一つの大きな空間につくりかえています。壁などのハード面はできるだけ展示にあわせてつくっています。

現在、四連棟は現代的なステンレスの入口ですが、建物の内部は古いままのものが一部残されています。壁の外から、昔の青い色の住所標識が見えます。現在の動線はゲートをはいて、スロープを経て右の方に館内への入口があります。最初のコーナーは「大漢溪」です。大溪を流れる川の名前ですが、まずみなさんに、大溪にはなぜこのような美しい風景、街並みがあるのか、その源になっているのが大漢溪であるということを知ってもらいたいからです。次のコーナーは「大溪に誰が住んでいたのか」です。異なる時代にいろんなところから沢山の人が大溪にきて、ここで生活していたということを説明しています。マルチメディアなどいろんな手法をとりいれています。清の時代から日本統治時代、戦後、そして現在に至るさまざまな時代に大溪に住んでいた代表的な大家族や有名人や一般の人びとの生活や生業を紹介をしています。



写真⑥ 常設展のオープニングで見に来た二人の長老が久しぶりにあった場面

た価値が私達もはじめてわかりました。たくさんのお年寄りが来館されました。たとえば九〇歳の方ですが、昔、工場をやられていて、大溪においてはそういった調査に関して、私達にとっては大先輩でした。彼だけではなく、八〇歳くらいの方地域づくりの大先輩も健在で、開館のときも積極的に参加してくれました。そして家族と一緒に開幕式に参加してくれました。独立展示のなかで自分の話を語ってくれた九四歳の方も来てくれました。みなさんが開館のときに来て、地元の人と濃密な交流を行いました。また、すでに大溪に住んでいない方も、もう一度自分の故郷にもどって、この展示を見にきてくれました。この四連棟の展示ですが、見た方から、「私の写真が展示されていま



写真⑤ 四連棟の展示風景

地域づくりに関する資料展示もあります。とても厚い冊子ですが、そのなかには、例えば、昔の写真や選挙のときにももらった選挙通知票など、貴重な歴史資料が保存されています。昔の写真や手書きの書類をたくさん保存されているおじいちゃんがいるのです。また社頭文化の調査をしていたときには、お祭りにつかっていた道具などもたくさんありました。それから地方の版画や絵図などです。この展示をやっていたときにはやはり不安な部分もありましたけれども、開館の日に、この展示をやった道具だけでも一つの特別展示ができるのではないかと思います。

は、大溪の地域づくりを紹介しています。現在、大溪公會堂というところでは、大溪の地域づくりを振り返る展示をしています。こちらで大規模な展示をやっていますので、この四連棟のなかでは少しだけしか触れていません。最後は、協力者のコーナーです。過去に博物館づくりに携わってくれた人びとが、自分の考え方や、自分の信念などを伝えてくれるコーナーです。いま私達には、収蔵空間はありません。コレクションもありません。この四連棟展示のなかでみなさんが見ている展示品は、博物館が所有していたものではなくて、一般の方々から収集してきたものです。提供してくれた方には本当に感謝しています。例えば、大漢溪を紹介するコーナーでは、林業をやっていた方の家に訪問していろいろな道具をみせてもらいました。木材加工をするときにつかっていた道具だけでも一つの特別展示ができるのではないかと思います。

すが、もう少しきれいな写真にしてください」というかわいい要望がありました。とてもうれしかったです。

これからですが、やはりこの四連棟の展示を一つの枠組みとして、将来もいろんな試みをやっていききたいと思います。たとえば町家の生活を例にして、展示をやっていききたいと思います。現在大溪においては、古いお店、まだ調査されていないお店、あるいは家屋がたくさんあります。もし、将来どう調査し、どう展示するという枠組みができていけば、より明確なイメージがでてくると思います。また、今後、各業界に対する調査もしたいと思っています。漢方薬産業の調査ができるのではないかと思います。例えば、現在源古本舗の展示をしているのですが、次の展示は漢方薬を中心に、展示、調査、そして教育推進ができるのではないかと思います。

また、実際のフィールドワークのツアーを組んでみたり、講演会、セミナーなども開催したりしたいと思います。最終的な目的は、大溪の人に自分のふるさとの話を語ってもらうことです。いわゆる大溪学という概念が、いままでより、明確になってきました。この大溪学というのは、もう少しローカルな方とコミュニケーションをとって、彼等自身の口から、自分の住んでいる土地を語ってもらいたい。そのなかで、私達博物館側は、やはり学術的な観点によってそういった語りの正しさ、あるいは適切さを判断する必要があります。また地方産業が重要ですが、あくまでも政府が運営しているので、この二者の役割をいかにバランスをとっていくのか、いかに協力していけるのか、検討していく余地があるのではないかなと思います。

## セッション5 大溪における実践事例と活動の実態

# 芸術、生活と古い家の保存と活用

## —大溪の源古本舗の再生計画

古 正君（大溪古家管理者）

源古本舗の再生計画をお話する前に、何故私が、大溪、そして、自分の家に戻ったかということをお話しなければなりません。この空間は一八〇年くらいの歴史がありますが、私は一八歳のときに家からでたいと思いました。なぜかというと、湯沸かし器がないのです。ガスもありません。だから釜に火をおこし、薪をたきながら、冬に二時間をかけてお湯を沸かさなければならなかったのです。私はかなり活発な性格で、外にでかけたいのですが、お湯を沸かさなければならぬのです。まわりは木製品をあつかっているのです、その木材を活用できるんです。釜がうちには三つあって、二つは店にあって、お菓子をつくっていました。もう一つは母屋にあって、お湯をわかすというようなことです。近所に木材をもらいにいって、木屑で火をおこすのに時間がかなりかかりました。二時間かけなければ、お風呂にはいれない。水も井戸からくまなければなりません。だから、大学にうかつたら絶対家から出る、お湯を沸かすことから離れたい。家出というよりふるさとから出て行くというようなことだったんです。うちはおかし屋さんでしたが、徐々に





写真① 源古本舗の中庭

だ、と不思議に思えたんですね。  
それから、もう一つ、上海にいったときのことです。航空会社とPR会社の連携による一年間の旅でした。上海ではたくさんの方の広告マンが働いていました。いろんな建築物や広告を出すために、台湾の方々ががんばっていたわけです。そのコンペに勝ったら上海に遊びに行けるという賞をもらって、建築関係のいろんなパーティーに出席しました。そこでは、ケーススタディとして、いろんなビデオが流れていました。そのなかで、またうちがでたんです。自分の心のなかで、何らかの根がついていたんですね。流される映像のなかで大溪は有名な町づくりの例としてとりあげられていました。映像を見ながら、「あれ私の家ですよ」と言ったら、みんなから「じゃあ、あなたは自分の家にどういった貢献をしましたか」と聞かれたんです。私はどう答えたらいいかわからなくなつて、「いやあ、私は何もやっていません」としか言えま

客数が減り、一日の売り上げはあまりよくありませんでした。有名なおかし屋さんだったので、父は店をたたみ、隣の木製品の倉庫として貸していました。

漸くこの生活から離れられるということで、私は喜びました。なのに私は何故戻ってきたか。自分でも不思議に思います。私はPR関係の勉強をした後、広告の会社で働いていました。いろんなところで遊ぶのも人生最大の魅力とと思っていました。カナダやアメリカなどには、移民した友達もいたのでけっこう遊びに行っていました。だから大溪が故郷からはなれているあいだにどんな変化があるかまったく気がつかないのです。でもなぜ戻ってくることにしたのか、なんらかのサインがあったんですね。一度出張でカナダへいったときに乗ったJALの機内誌に、いろんな風景を紹介するコラムがありました。そこには、「台湾に旅するならば、大溪がすごくすばらしい小さな町で、日本時代には繁栄していた湊町で、日本人が残したいいろんな建物もあります。もし運がよければ、源古本舗の見学ができますよ」というような記事がありました。その機内誌がのせていた写真は別世界みたいな感じで一つの象徴のようでした。自分の家がこんなに有名なのと感じました。町づくりの林先生などが、この家屋を利用して、事務所として使っていたんです。だからその機内誌で家屋の紹介をしていたんです。それを見たときに、「あれ、この家はきれいだ、どうして私は知らない?」というように感じました。その一方で「この家がどれほどおそろしいのか、あなた達は知らないでしょ」というような感じもありました。まだこのときは、それほど感動はしなかったのです。やはりこの壁とか、柱の後ろには雑草が生えていて、ほんとうにすごく雑然としているのになぜこんなにきれいな角度から自分の家を見てくれたん



お湯を沸かしていた嫌な記憶もだんだんと薄れました。そして世界各国でそういった古い家屋を修繕している例もみえました。例えばルイヴィトンとかいった世界的なブランドは、フランスなどのヨーロッパのまちで、古い家屋を利用してお店にしたりしている。そういう例がたくさんありました。そこで私は、それがきっかけとなって、自分の家の空間をみつめるようにしてみました。私達のお店「古裕発」は、昔、台北でもビジネスをやっていました。台北だけではなく、ほかの地方からも私達の「古裕発」にきて、おかしを買って、自分の村へもどって売るといふ、卸の店だったんですね。現在は、食事もだしていますが、必ず焼きビーフンというメニューがありま



写真② 源古本舗の前身、古裕発といった有名な菓子屋さん

選んだので、始末しなければならなかったんです。

このような家屋がみなさんに注目されるにはどうしたらいいのか。役所の人からは「マスコミにとりあげられるか、大統領とか有名な人に注目されないとなかなか予算はおきませんよ」と言われました。私も端くれでもPR業界出身ですから、じゃあやってやろうじゃないかと思いました。日本統治時代には私達のお店は「古裕発」という名前の店でした。お菓子をつくって、とても有名だったのです。なのでこのような歴史を利用できるのではないかと思いました。また、素晴らしい家屋であると、修理して行くあいだに私自身も気づきました。いろんな想像が私の頭に沸いてきました。昔、

せんでした。こういったことが起こったのかまったくわからなかったのです。だからそのときに大溪に戻るべきだと決意しました。で本当に大溪に戻ってきました。

ただし、毎日戻ってくるのではなくて、週末に戻ってきて家で店を開こうと思ったんです。何かを販売するという目的で自分がふるさとに戻ってくる、というような気持ちを取り戻したわけです。うちの親は、もちろん、すぐよるこんで、両親が店をみてくれていて、私は家のいろんな修理とか修繕をしていたわけです。でも修繕とか片付けのあいだに、自分の力がなかなかおよばないことに気がついたんです。ある週末に帰ってくると、自分の商品が全部水浸しになってしまっていました。屋根が傾き出して、水漏れがひどかったのです。それで、いろいろ調べると、文化資産になれば修繕計画を出せば、何か補助金がでるということでした。それで、家族と相談しました。しっかり家族を説得して、自分のうちのどこが壊れているのかというのを調査し、政府の窓口で修繕はできるかときいてみたら「考えが甘いですよ」という答えでした。私は二〇一一年に調査を終えたのですが、たぶん百年待たなくてはならないといわれたんです。政府の予算というのは、とくにこういった有形文化資産の修繕に対しては、あとにあとと回されるような感じなんです。「しかもあなたのところは民家だし、お寺とか政府の建築物ではないので、考えが甘いですよ」とも言われました。私はかなり落胆しました。ようやく家族を説得したのに、どうしたらいいのかわからないのです。自分の家が文化資産になっているので、勝手に修繕はできないんですね。修繕のときにいちいち許可をもらわなければいけない、政府が私の大家さんみたいな感じになってるんです。どうしたらよいかわかりませんでした。でも家族を説得し、修繕する道を



写真③ 大溪の長老を集まって昔話をしてもらう

す。焼きビーフンは他の地方から家に仕入れに来たときには、やはり、その人達にもお腹いっぱい食べてもらいたいという、おもてなしとして必ずだしていました。うちでは卸問屋をやっていたので、干し椎茸とか、そういった食材がたくさんありました。なので、仕入れにきていた方はこの焼きビーフンを食べて非常によこんでいたという記憶がありました。

この家に住んで私が五代目ですが、私は近くの市場へいくとかならず、周りの方が声をかけてくれます。たとえば、端午の節句には、ご近所さんはうちに集まって、雑談しながら粽をつくるんです。そういった子どものときの記憶も私のなかにありました。昔の生活の記憶です。夕方になると、今日は誰々がきませんね、誰々と話していましたねと話していた記憶があります。ご近所さんは、私が台北から大溪に戻ることが不思議だったようですが、私がお店を営んでいるときにも「こういうものは売ったらいけない」とか「こんなものの方が売れるんですよ」とかいろいろアドバイスをくれました。一方、うちの父親からは「この壁だけは絶対いじってはいけない、これはまるで日本の侘び寂びのような風情を出している壁だから」と必ずこれだけはもとのままとっておいてよと言われることもありました。ですから私は、伝統のものも残しながら新しさを出そうと思っていました。そして政府から百年待たないと補助金が降りないということに私もチャレンジしてみようと思っていたんです。そこで私が思いついたのは、季節に合わせたイベントの開催です。

大溪から台湾のほかのところ、あるいは外国に出ていった人もたくさんいますが、そういった人達もふるさとに戻る機会があります。そこでそういった人達向けにイベントを企画しました。例

えば、里帰りのときに自分で粽をつくるとかをやってみました。当時はもちろん予算は重要な問題ですけど、それだけではなく、ほかの使いかたも駆使して、私のやり方をみなさんにみてもらいたいということを考えました。そこで地域づくりの経費を申請してみました。はじめておりました補助金は一〇万台湾ドルです。すごくうれしかったです。そのお金で実施したことにより、地元や地元と関連している人とのつながりができたからです。私が大事にしているのは、そういうことをやっている雰囲気です。サポートしてくれた人も感動していました。三、四年くらいこのようなことをやっていました。

季節にあわせていろんなイベントを企画しました。このような生活の美学という手法を利用して、台湾の過去の美しさ、あるいは繁盛していたときの記憶をもう一度呼び起こしたい、例えば、うちの建築はきれいです、この建築で何か物語りはできないかと思っていました。

近所のおじさん達は、集まって話すのが一番嬉しかったみたいで、昔話に華を咲かせます。観光客がくると、さらによこんでいました。

それで、この物語や雑談を定期的にできないかと思

貸し出しました。過去の生活、伝統のなかでみなさんが使っていたもののなかには、実は現在の新しい生活のなかでも、いろいろ使えるものもあって、特に私は、昔、PR会社につとめていたので、こうした需要の可能性を十分理解しているのです。そして、古い物をいかに現代の生活に運用していくのか、例えば写真をとったり、ビデオをみせたりしています。いろんなイベントも企画しています。ダンスグループに、私達の家のなかで、パフォーマンスをやってもらったりもしました。あとお年寄りがトークショーをやるときに場所を提供するということもしました。あるいは地元出身のアーティストがもどって活動することを応援するともしています。私がやるうとしてるのはチープなものではなくて、昔の伝統や生活のなかの美しさ、繊細さをみなさんに気づいてほしいからです。今では家屋の活性化というテーマで補助金もいただきました。



写真⑥ 台湾の伝統の人形劇のアーティストがレジデントして演出してもらう

この廃材も工場にお願いしてもらいました。瓦を床にはめこんだりしました。今年は家屋の修繕の第二段階、第三段階まで進むことになりました。修繕するときには瓦だけでなく、昔の廃材でもちゃんとつかえる材料は、それらを使うようにしています。

ほかの博物館の地域づくりの団体から、展示をやるので資料を貸して下さいと言われました。私はよるこんで



写真⑤ 現代舞踊のダンサーが古い屋敷で踊ってもらう



写真④ 源古茶席

ました。先ほど紹介した粽づくりのイベントのかたわらで、おじさん達に物語を語ってもらえるような企画をしました。

それから飲食に注目してみたいと思いました。このきれいな写真を撮ってイギリスの雑誌にのけりました。すると雑誌の方がきて、うちの空間を利用して、デコレーションなどは彼等がくれましたが、東洋式の結婚式を演出してみました。

私はその雑誌が撮ってくれた写真を政府にのけりました。あと百年なんて待てません、この空間を是非保存していきたいと主張するためです。マスコミにとりあげられないと政府はまともに考えてくれないということが、現実問題としてつくづくわかっていましたから、いろんな方法で、こういった露出する機会をつくりました。それをもって説得しました。だましたという聞こえがわるいですが、いろんな手段を駆使して、政府側を説得してみました。

たくさんイベントを企画しましたが、近隣の方々もいろいろと協力してくれました。私が瓦に関する活動をした一番大きな目的は、お隣さんに私が何をやっているのかを伝えていきたいということ。瓦は、ほんとうは使わない廃材なんです。





写真② 「下街四十番地」の入り口の昔の様子



写真① 大溪の街並みの昔の風景

一つとりあげられました。修繕が完成したときに、これまでは有形のものですが、無形のものはどうしたらいいかという話が出ました。それで大溪の文化祭でイベントを開催しました。ポスターは、私が描きました。獅子舞もあって、それはコンテストになっていました。有形の建造物を修繕したわけですが、このように無形も保存しなければならない段階にはいりました。手元には、祖父の兄の名刺があります。お兄さんが亡くなって、祖父の名刺になったんです。仏像づくりが、家族が継

セッション5 大溪における実践事例と活動の実態

## 民家と家族の記憶と技能

### ——家からまちかど博物館へ

劉 清剋(下街四十番地アトリエ責任者兼館長)

私の工房があるのは、ちょうど私の祖父が住んでいたところです。下街四十番地というのが住所になっていて、住所をそのままこの工房の名前にしました。この建物が建てられたのは一八九二年です。伝統的長屋形式で、前が店舗、後ろが居住空間です。ここで、私の祖父から受け継いだ伝統工芸店を運営しています。

この建物のなかで、自分達家族がもっている技術や道具、材料などを展示しています。街角館のことを語る前に、なぜ、私が町づくりをやるようになったのかについてお話します。

ちょうどその頃、文化をどう広めるかということに、みんながすごく努力していました。大溪の文化にいかに関心してもらおうかということです。そのとき私達の街のリーダーが、大溪の文化をどのように保存していくのかという話題をもちだしました。それで、いろんな予算をつくったりして、まずは歴史的な建造物を保存しようということからはじめました。建造物といってもいろいろありますので、どこからスタートするのかと話し合った結果、私のところからは始めるこ

とになりました。私はこの町づくり、あるいは、建造物の修繕にボランティアとして参加することになりました。

まず、ボランティアとして子ども向けのワークショップや、小麦人形づくりのようなワークショップを開催しました。

そして、当時、台湾ではいろんな看板をとりかえようという風潮があつて、看板をどうきれいに揃えるかというところから、その活動がスタートしました。

このころになって大溪はある程度有名になってきました。町づくりの博覧会にも出展しました。看板も出展作品として一つとりあげられました。

修繕が完成したときに、これまでは有形のものですが、無形のものはどうしたらいいかという話が出ました。それで大溪の文化祭でイベントを開催しました。ポスターは、私が描きました。獅子舞もあって、それはコンテストになっていました。有形の建造物を修繕したわけですが、このように無形も保存しなければならない段階にはいりました。

手元には、祖父の兄の名刺があります。お兄さんが亡くなって、祖父の名刺になったんです。仏像づくりが、家族が継



大溪においては、木工芸だけではなくて、漆工の業界でも祖父がたくさんのことをやっていた。私が小さいときは、叔父達は、あまり手工芸をやりたくないと言って、公務員や貿易をやっていた人が多かったのです。私の母親が長女でして、叔父達が結婚するのが遅かったので、従兄弟よりも歳がだいぶ上です。私はずっと祖父と住んでいて、自然に家の技術を受け継ぐかたちになりました。

私が進学するときには、当初、普通の高校にいかうと思っていたのですが、祖父から、「将来、お前は私の仕事を受け継ぐんだから、夜間学校に通いなさい」といわれました。私は地元では「全先生のお孫さん」として名前が通っています。

人形をつくるには、竹細工でなかの骨組みをつくらないといけません。こういった作業は簡単に見えますが、実際にやってみると、かなり難しく、経験を要する技術です。骨組みができたら、紙をよって形をつくりまします。

大溪では、獅子舞に使われている道具をつくる風習があります。昔は紙でつくりましました。まず、粘土で形をつくって、それを乾かして型としてつかいます。現代の方法だと、手法は殆ど同じですが、一つの型をつくって、龍のかたちなど、より繊細なかたちができます。小麦粉人形というのがあります。これは、信仰に関連するものですが、祖父の二番目のお兄さんは、お寺のお祭りのときに料理を出す役を担っていました。そして、そのとき、料理が豪勢に見えるように、小麦できれいな食べ物を作る習慣がありました。実は私の祖父は、木彫りだけでなく、小麦の人形細工も得意でした。また印鑑造りも得意にしている、日本統治時代に一番多かった仕事は印鑑造



写真④ 街角館としての現在の展示風景



写真③ 「下街四十番地」のなかの昔の様子

承してきた仕事です。祖父が七一歳のとき、私は中学校を卒業しました。子どもの頃からおじいさんと住んでいるので、小さな頃からいろんな技術を伝承してもらいました。

工房にしても店舗にしても、何をやればいいのかと考えた末、いろんなおもちゃを販売することにしました。

家族の工芸を紹介するためには、曾祖父から説明しなければならなりません。清の終りの頃には一応、木工芸を営んでいて、四人の息子がいました。大陸から仏像造りの師匠を迎えて、長男がなりました。それから次男はかなり有名なレストランで修行し、料理人になりました。

三男は長男の仏像づくりがかんばしくないで、ハンコなどをつくりましました。絹の上に絵を描いたり、ガラス工芸に絵を書いたりもしました。

長男が亡くなった後、四男である祖父が、兄達の工芸技術全部を受けつぎましました。祖父は、仏像造りを粘土からと木からの両方で行いました。仏像の彫刻には、まず木材の選択、かたとり、みがき、ペインティングなどの過程がかなり複雑です。さらに金箔貼り、色塗りをしてやっと完成品です。



写真⑥ 昔使っていた道具も展示されています

角館のなかで展示しているのは、このようなものです。つまり、私の祖父や彼の兄弟達がつかっていた道具や作品です。現在、私が経営している街角館は、家族がたくさんの技術を有していたので、その家族の力によってつくっていた芸術品、そして、それらは、大溪の工芸の発展を代表していますので、これからもこの空間を利用して、小型の博物館という形で私の家族の歴史、大溪の歴史をみなさんに伝えたいと思っています。

本の屏風とか天井に描かれていた絵がありますが、それをこちらでは木に描くことになりました。またオランダ人の影響を受けたステンドグラスみたいな絵もあります。祖父の三番目のお兄さんが描いていました。神像などが窓だったりベッドの上の方の板だったりに装飾されていたものが見られます。

そういった古い伝統的な技術だけではなく、新しいものも考えなくてはならないと思っています。ここは、川に近いので造船技術もありました。船は風によって動いていたので、私は風車を思いついたんです。木工芸の技術プラス風車という組み合わせで、工芸品をつくりました。

また、時代の変化によって大溪の伝統工芸を新しい物に託して、いろんな新製品をつくりました。いまは、わりと生活のなかに密接しているキーホルダーやハガキ、ノートのカバーなどに昔の墨書きの技術をつかっています。現在私達が所有している街角館のなかで展示しているのは、このようなものです。



写真⑤ 筆者は伝統工芸の匠

りでした。誰でもつくれるわけではなく、免許制だったんです。昔の生活では重要だったので、お年寄りには自分の印鑑を小さな巾着にに入れて腰回りにつけていました。日本統治時代に重要だった以外に、民間信仰にも印鑑が使われています。そしてまた、木でいろんな彫像、花などをつくる技術もありました。私の祖父は、もともと木彫りの仕事はあまりやっていませんでした。祖父の親友が、ふるさとを離れて遠くへ行ってしまったのですが、彼がもともと木彫りに使っていた道具を譲ってくれたのです。清の末期から日本時代にかけて、いろんな伝統的な技法が残されていましたが、例えば、粘土で木のなかにはめ込むというような技術もありました。まずこの木の上で模様をつくり、粘土を入れた部分を彫って取り出します。それで、粘土を木のなかに入れる。そうすることによって、粘土の部分と木の部分が非常に対照的なものができます。一般の家庭ではなかなかこういう工芸品はみられません。

例えば西洋式の棚では装飾的な模様が彫られているのを見かけます。またその粘土を使う以外にも墨を使う技術もあります。日本の大正時代から残されてきた技術です。

戦後、祖父はお寺のために、宗教の絵もかいていました。墨の絵だけではなくて、色付きの絵もありました。日本統治時代に残されていた習慣です。日



写真② 蘭室の入り口の門



写真① 蘭室の真正面

はありませんでした。でもこの古い家を、私達の手できちんと保存していこうと心に決めています。

私達のチームは、蘭室を保存するには、何をどのようにやればいいのかを考えました。参考にするため日本も訪ねました。京都の職人工房とか、倉敷の美観地区も見学しました。日本ではどのようにやっているのかを見て、現地の人達と交流もしました。京都の職人の作品を理解し、よいものがあれば、台湾にも導入しようと考えていました。竹中大工道具館にもいきました。

蘭室の歴史は、呂家の鷹揚と鐵州の古い屋敷で、一九一八年に建てられた建造物です。鷹揚は大溪の秀才で、自分の家を開き、教育をおこないました。一八九九年に大溪の町長になって、そのあと土地を寄付して学校としてつかってもらったという、チャリティー活動をやっていた人でした。肖像画が残っていますが自分の息子、鐵州に描いてもらったものです。鐵州は、小さな頃から絵が好きで、大陸からいろんな画集を買ってきて、真似をして学びました。台北で三回特賞をもらったので、もう審査はなしということそのまま展覧会に参加することができました。鐵州は一九二五年に別のところに移ったのですが、そ

セッション5 大溪における実践事例と活動の実態

## 学習の資源としての地域文化

### — 蘭室を例として

林 昕（蘭室文創株式会社 CEO）

「蘭室」というのは、看板に掲げている文字です。だから私の会社は蘭室文創株式会社となっています。私は台湾でいろいろな街づくりの仕事をやってきて、すでに二〇年になります。かつて蘭室は、なかなかドアが開いていないということでも有名でしたが、二〇一四年に偶然ご主人が帰ってきて、「蘭室があいている」という情報を得て、はいることができました。なかを案内してもらいました。窓や棚などに、いろんな彫刻がほどこされている。それらは、当時、かなり有名で熟練の職人さんが彫ったものだとか推測されています。ですから、一般の民家で見られるものとは違っています。もともとは町屋で、一三番というところを購入して会社の事務所にしたわけです。すごく素朴なドアなど、ほとんど何も手を付けられず昔のまま残っているという感じでした。

「古い屋敷は自分で自分の主人を選ぶ」というような話がありますが、私達は幸運にもこの大溪の一員になれるのがすごくうれしくて、私達はこの屋敷に選ばれたと思っています。

蘭室を八名の共同出資で購入しました。これは結構特殊な例で、全員がもともと大溪の住民で



私達が購入する前、すでに六〇七年は、だれも使っていませんでした。危険な部分をとりはらっていました。

例えば中庭に薪棚がありますが、実は少しあぶない柱がありました。まず安全性を確保してから、去年の五月一八日に、博物館の特別展示として空間を提供しました。もともとプライベートの住宅ですので、一般の方々はなかにはいる機会がありませんでした。全部整理して、やっと開館できたのが去年の五月でした。

また、八月に街角館の補助金をいただき、鷹揚と鐵州の画集作品の展示を行いました。この建物の元のオーナーである呂親子の物語も知ってもらいたいということで、この展示をやりました。



写真③ 蘭室を購入して一緒に運営する人々

の後も度々大溪に戻ってきて、いろんな写生をしました。

蘭室は歴史的建造物として登録されました。古い建物を修繕していくにはお金がかかります。歴史的な建造物に登録すれば、補助金がもらえます。待たなければいけません、補助金があればということ、メンバーの同意を得て登録しました。

そして、大溪の文化を受け継ぐのも私達の使命です。大溪にはすばらしい芸術の資産がありました。私達のチームが自分達に課す使命は、ぜひ大溪の文化資産を受け継いでいこうと、特にこの蘭室は呂鷹揚と鐵州の実家だったので、やる意味があるのだと思いました。

その後、ボランティアが街を案内するときに、かならず蘭室を訪れることになっています。

いろいろなワークショップもやってきました。例えば鐵州がかいていたトリの像を、子ども達に色塗りをしてもらうように道具を提供しました。毎日子ども達がここにきて楽しくお絵描きをしていました。地元のおかあさんたちと協力して、絵本の物語を語るといイベントもやりました。大溪を主役とした絵本を地元の子ども達に語っていくことはとても意味のあることだと思います。

今年から家屋の整備をしています。床はもともとコンクリートでしたが、入口の部分を作り替えた所があります。外の部分が内部より高かったので、床にレトロっぽいブロックをつかいました。まず壁際に溝をつくり、炭をいれました。この炭が湿気をとってくれます。壁の方にもかなりダメージがありましたので、従来の修繕方法にのっとってやりました。前のオーナーはコンクリートで修繕をしていました。私達のメンバーのなかには専門家がいますので、伝統的なやり方で修復しました。四月には蘭室書庫を開店しようと思っていましたので、それを控えて掃除をしたり、すべての窓や扉を整理したりするという、かなりおどろきの作業をしました。鐵州は有名な画家ですので、ここにおいでいる本もその絵を紹介するものが多いです。将来的にはお茶も飲める空間にしたいと思っています。

また、このような古い家屋が過去にやっていた経験をシェアするトークショーなどのイベントもありました。屋外映画館もありました。大溪ではこういった特殊なタイルなどの建築がありました。通りがかった人も見てみようかなという雰囲気がありました。例えば、その日に放映されていたのは、





写真⑥ 中庭の薪棚

をもう一度整備して開放することによって、現代のみなさんも昔の文化人の生活を感じとれるのではないかと思います。第二段階では茶室を作った開放しようと考えました。どうしてお茶かというと、大溪は昔お茶の産地でした。こちらで生産したお茶は大漢溪を通じて、輸出されていきます。なので地元にとって重要なお茶をじっくりこの空間で楽しめるのはいいんじゃないかなと思います。

この建築のなかには、ご覧の通り、天井から太陽光がはいりますので、それを利用しています。またお茶の体験コースもありました。きていただいた先生は、アメリカで広くお茶の文化をひろめた有名な方ですので、沢山の方にきていただきました。

鐵州と彼の弟子が国家美術館で展示をやっていました。そのお弟子さんは二〇〇二年に亡くなりましたが、この二人が百年くらいの台湾のガッシュの歴史そのものではないかと思ひまして、私達も美術館がドキュメンタリーを撮ったときに協力をしました。

薪棚は、上部に装飾されていた彫刻作品です。いまは下に立って上をおおいでみるので、なかなか詳しくみれませんが、写真にとって記録していました。左上のほうには、ちゃんと、鷹揚の名前からとってトンビが描かれています。先ほどの蘭室のタイルもそうですが、右の方にも「ル」という文字が入っていました。真ん中の上にはトンビが描かれています。自分の名前を、建物をつくったときにいれたという



写真⑤ 子ども向けの描きのワークショップ



写真④ 呂鐵州の画集作品を展示して講座をも開催しました

二〇年くらいまえのドキュメンタリー映画でしたが、なかなか放映する機会がありませんでしたので、製作に関わった人のトークショーもやりました。あとガッシュの展示です。ガッシュは鉱物を粉にして、顔料でつくった材料ですのとても高価です。現在は改良されて安いガッシュもありますので、是非その改良とともにガッシュという芸術をひろめたいという展示もやってきました。子ども達がきていっしょにお絵描きをするというワークショップもやっていました。

蘭室という空間ですが、将来も活性化させていきます。またそういった地方産業の活性化は地域づくりの基礎だと考えています。私個人の見解ですが、この空間自体が時代文化の展示品です。この建築そのものがそうです。ここを訪れてくれた人すべてが興味をもったのは展示品ではなくこの建築でした。壁をむき出しにしているのは、いまはなかなか他のところでは見られません。私達もあえていじらずにそのまま表現しています。清の時代の文化人が、時代の変化のなかで、新しい西洋文化にふれながら、古い建築の美しさをいかに残そうとしたか、その努力がみられると思います。このような長屋形式の建物

ことですね。茶室のメニューのなかにもそういった彫刻の作品をとりいれています。

蘭室の色をどうするか考えていましたが、これまででは、ペンキで何層もぬって、前の色をカバーしていました。ではそのペンキの奥がどんな色だったのかと思ってはがしました。最終的にできたのが、赤です。素晴らしいと思い、そのまま残しています。なのでこの赤をメインカラーとしました。もう一つは、鐵州の絵のなかには山娘という台湾の特有種の鳥が描かれていますが、この青もとりたいように思いました。

現在は、「蘭室の歴史と今」を展示しています。鷹揚とこの地方に関するのですが、もう少し詳しいフィールドワーク調査をして、具体的なイメージで鷹揚のイメージをだせないかなと考えていました。私は呂さんの家族とはなんのいわれもありませんので、よく「なぜこんなにがんばったのですか」と言われますが、どちらかというと私が選ばれたという感じなんです。現在、呂さんの子孫が戻るときには、私達にとっても感謝してくれます。建物自体はすでに私達が購入しているので、所有権は私達にあります。彼等を歓迎し、いらっしゃるときには、はいっていただきたいと思っています。彼等にインタビューをしたり、あるいは彼等がもっている新聞や資料を積極的に収集したりしてきました。その収集した結果は現在ここで展示しています。

蘭室というのはもととくさんの要素がこめられている空間ですので、これからもそういった要素をつかって続けて活性化して行きたいと思っています。

## おわりに

日高 真吾

今回のこのフォーラムでは、日本と台湾の地域文化の発見、保存、そして活用というテーマでそれぞれ発表をしてまいりました。日本側の発見に関しては、大学や博物館がはたらきかけながら、地域住民とともに地域活動を展開していく、そういう視点での発表をさせていただきました。台湾側の発表は住民主導型の地域活動を博物館等が支援をおこないながら広く展開しているという発表がなされていたと思います。

特に本日、大溪在住の方が力強く活動されているという発表は、ほんとうに大きな驚きと感動をもつてきかせていただきました。

これらの報告をきいていて、日本側、台湾側、相方で共通している点もあると感じることもありました。それは何れの話も活動の中心に地域の人がいるということ、そして、地域住民を中心としながら、博物館、大学、研究者といった人達が、つながっていくという構図が共通しているのではないかと思います。

確かに今回報告された活動はそれぞれ異なる立場の人達があつまって行っているわけですが、今回のポスターはそれぞれの特性を活かしながら、腕を組み合って進めていくというデザインになっています。とてもこのフォーラムの意を得たポスターデザインだったのではないかと思います。

今回のテーマである地域文化の発見、保存、活用ということは、地域文化を継承し、次の世代に伝えていくことにつながっていくテーマだと思っています。

ただし、この次世代への地域文化の継承を実現する為には、いまここにいる私達の世代が、その地域文化についての意味を発見し、それを伝えて行く意義を感じとらなければスタートできないことだと思っています。

そのスタートをきったあと、次の世代に伝えていくための、保存であったり活用であったりといった具体的な活動が始まっていくことなんだと思います。

このような点というのが、今回の報告、あるいはディスカッションから見えてきた大きな成果ではないかと考えています。

今回のこのフォーラムは、台北芸術大学そして私達国立民族学博物館の協定事業の一環として実施してきました。

この企画を実現するためには大溪の木芸術生態博物館の陳館長をはじめとするみなさんに大変なご協力をいただきました。お礼を申しあげたいと思います。これで私の挨拶とさせていただきます。

謝謝。

## 小谷 竜介

所 属 東北歴史博物館  
 専門分野 日本民俗学  
 著作 『鮭〜秋味を待つ人々〜』（東北歴史博物館、2003 年）、『波伝谷の民俗』（政岡伸洋、鈴木卓也と共監、東北歴史博物館、2008 年）など

## 謝 仕淵

所 属 国立台湾歴史博物館  
 専門分野 物質文化史、パブリック・ヒストリー、オーラル・ヒストリーと記憶遺産  
 著作 『「国球」誕生前記：日治時期台湾棒球史』（国立台湾歴史博物館、2013 年）、『日治時期台湾棒球口述訪談』（国立台湾歴史博物館、2013 年）など

## 林 奠鴻

所 属 財団法人大二結文化財団  
 専門分野 まちづくり、文化財の保存と活性化

## 許 主冠

所 属 台湾城郷特色発展協会  
 専門分野 まちづくり、文化財

## 日高 真吾

所 属 国立民族学博物館  
 専門分野 保存科学、保存修復  
 著作 『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』（千里文化財団、2015 年）、『女乗物—その発生経緯と装飾性』（東海大学出版会、2008 年）、『記憶をつなぐ—津波被害と文化遺産』（日高真吾編、千里文化財団、2012 年）など

## 黄 貞燕

所 属 国立台北芸術大学博物館研究所  
 専門分野 博物館と地域社会、無形文化遺産学  
 著作 『日韓無形的文化財保護制度』（國立傳統藝術總處籌備處、2008 年）、『2005-2008 年臺灣無形文化資産保存年鑑』（行政院文化建設委員會文化資産總管理處籌備處、2009 年）、『民俗／民族文化的蒐藏與博物館』（國立臺北藝術大學、2011 年）など

## 政岡 伸洋

所 属 東北学院大学  
 専門分野 民俗学、日本史学、アジア文化史  
 著作 『図解雑学こんなに面白い民俗学』（八木透と共編著、ナツメ社、2004 年）、『仙台の祭りを考えるための視点と方法』（大崎八幡宮仙台・江戸学実行委員会、2014 年）など

## 康 文榮

所 属 楊逵文学記念館諮問委員、寿香食品股份有限公司



## 温 欣琳

所 属 桃園市立大溪木芸生態博物館  
 専門分野 地方産業と民俗調査研究、展示企画及び設計  
 著 作 「Interpreting the Industrial Heritage: A Case Study on Kaohsiung Sugar Refinery」(国立台北芸術大学大学院博物館研究科修士論文、2010 年)

## 古 正君

所 属 大溪古家  
 専門分野 資源統合

## 劉 清剋

所 属 下街四十番地アトリエ  
 専門分野 台湾の伝統的な仏像彫刻、紙紮、捏麵

## 林 昕

所 属 蘭室文創株式会社  
 専門分野 まちづくり

## 末森 薫

所 属 関西大学国際文化財・文化研究センター  
 専門分野 文化財科学、文化財保存科学  
 著 作 『麦積山石窟環境と保護調査報告書』(共著、文物出版社、2011 年) など

## 伊達 仁美

所 属 京都造形芸術大学  
 専門分野 民俗文化財の保存修復ならびに活用

## 陳 倩慧

所 属 桃園市立大溪木芸生態博物館  
 専門分野 コミュニティ開発、文化財の保存、博物館

## 平井 京之介

所 属 国立民族学博物館  
 専門分野 社会人類学、東南アジア研究、日本研究  
 著 作 『微笑みの国の工場——タイで働くということ』(臨川書店、2013 年)、『村から工場へ——東南アジア女性の近代化経験』(NTT出版、2011 年)、『実践としてのコミュニティ——移動・国家・運動』(編著、京都大学学術出版会、2012 年)

---

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト  
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット  
**新しい地域文化研究の可能性を求めて vol.4**  
地域文化の発見、保存と活用

発行日／2018年3月30日

編 者／日高真吾

発 行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト  
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印 刷／特定非営利活動法人 Knit-K

---